

ゆるしとは何か

佐々木 勝彦

はじめに

忘れた頃に、間欠泉のように定期的に湧きあがってくる場面があります。それは、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」というペトロの問いに対して、「七回どころか、七の七十倍までも赦しなさい」（マタイ一八・二三）とイエス・キリストが答える場面です。そのようなことが本当にできるのでしょうか。たとえそうしたとしても、この世の現実は変わらないのでは？ むしろ悪をはびこらせるだけでは？……

しかしこの言葉をそのまま生きることができれば、敵意と憎しみと怒りを前提としたわたしたちの人間関係は、劇的に変化するはずで、家族や友人の関係から、国と国の関係に至るまで、

ミクロの世界からマクロの世界まで、対話が可能になり、「戦意高揚」の仕掛けは不要になるはずで、

二十世紀は、科学の世紀であると同時に戦争の世紀でした。そして残念ながら、二十一世紀もその実体は変わりません。科学の発達により、相手の「顔」をイメージせずに、殲滅することが可能になりました。その技術はますます精巧になるばかりで、何の痛みも覚えずに、「顔のない」相手を抹殺することができます。かつては夢物語であった「監視衛星」が現実となったように、やがて地下に隠された秘密兵器でさえ見通すことができるようになるのかもしれませんが。

しかしいずれにせよ、戦いを仕掛けるには、それだけでは足りません。最後の切り札がなければなりません。それは、「憎しみ」

と「怒り」、つまり危機感に基づく「敵意」です。これさえ醸成することができれば、戦争は思い通りであり、ホロコーストも、ジェノサイドも再現できます。さすがに「核の冬」だけは避けようとするでしょうが、その「恐怖」を人質に、「憎しみと怒り」を煽り、戦争と虐殺へと導くことができます。

現代日本の「教育」も、この「憎しみと怒り」の現実を背景として展開されています。「積極的平和主義」などという、甘く欺瞞に満ちた言葉が「教育」の指導理念になろうとしています。それは、「平和」を実現するには「武力」が不可欠であるとする思想であり、「憎しみと怒り」を煽ろうとする思想です。それは「非暴力と平和」の思想を否定します。力には力を、「目には目を、歯には歯を」(マタイ五・三八)の論理で突き進もうとしています。これに対し、「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ二六・五二)と語ったのは、やはりイエス・キリストです。またヨハネは、「剣をさやに納めなさい。父がお与えになった杯は飲むべきではないか」(二八・一一)という言葉も伝えています。イエス・キリストは、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(マタイ五・四四)と教え、「わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように」と祈るように勧めています。

キリスト教育は、これらの言葉に基礎づけられた教育です。それは、「腹を立ててはならない」(マタイ五・二一以下)、「復讐してはならない」(マタイ五・三八以下)、「人を裁くな」(七・二)と語り続ける教育です。

以下に紹介するのは、これらの思いを反芻する中で出会った書物です。「ゆるしとは何か」というテーマを念頭に置きつつ、対話した相手です。——なお、引用文献における「ゆるし」「許し」「赦し」という日本語表記のちがいは、邦訳原文を尊重した結果であり、あえて統一することはありませんでした。

I 「憎しみ」はどこからくるのか

最初に紹介するのは、ラッシュ・W・ドージア Jr 著『人はなぜ「憎む」のか』(桃井緑美子訳、河出書房新社、二〇〇三年・Rush W. Dozier, Jr. *Why we hate?* Contemporary Books, 2002)です。原著は邦訳の一年前(二〇〇二年)に出版されており、著者はピューリッツァー賞を受章した作家です。彼はハーバード大学を卒業した後、新聞編集者、弁護士として活動するかたわら、ノンフィクションの作品を発表しています。彼の得意とする手法は、ひとつのテーマを、自然科学、心理学、社会学などの多様な視点から

分析するものです。本書も、脳神経学、心理学、人類学、古生物学、動物行動学、社会心理学、精神医学、遺伝学などの知見を用いて、「憎しみ」を多角的に分析しています。

原著の発行年次から推測されるように、執筆の背景には、二〇〇一年九月十一日の同時多発テロ事件があります。

ラッシュによると、『憎しみ』は心の核兵器」であり、爆発すれば、それは社会秩序を吹き飛ばし、世界を戦争と集団殺戮の渦に巻き込み、道徳と寛容の心を一掃し、ひとを残酷な行爲へと駆り立てます。テロの動機は憎悪にあり、その武器は恐怖です。この憎悪が心を支配するとき、理性の働きは停止し、他者への共感の思いはまったく麻痺してしまいます。

それにしてもなぜひとは憎むのでしょうか。ラッシュはこう述べています。

・ 私たちは、なぜ憎むのだろうか。進化の観点からみると、答えは簡単だ。憎悪とは、進化の主たる目的である生存と生殖をおびやかすものを攻撃するか回避するために選びだす原始的な情動である。……憎悪は極度の激しい嫌悪であり、極度の恐怖、すなわち恐怖症とよく似ている。『人はなぜ憎むのか』桃井緑美子訳、河出書房新社、二〇〇三年、二九頁)

ゆるしとは何か

・ 憎悪は状況によってさまざまに表現される。怒り、憤懣、屈辱、嘲り、嫌悪、回避、憤慨、無視。高笑いしながら酷いことをするように、憎悪はプラスの情動をマイナスの情動に変えることもある。しかしこれらの情動すべての根底にあるもの、そして憎しみを抱くときに感じるもの、それはたとえおくびにもださなくても、敵意である。もつとも長引く激しい敵意、それが憎悪なのだ。(三五頁)

・ 憎しみは、生存と生殖という進化の主たる命令を実行するようにプログラムされた辺縁系が生みだすものである。扁桃体とそれに連絡している辺縁系のほかの部位は、危険と機会——草むらにひそむへびとそれから逃げるための最短の方法——を検知する仕事をしている。辺縁系は生存のための原始的な反応をつかさどる部位であるため、扁桃体がいったんへびらしきものを危険とみなすと、その反応は変えにくい。(三二頁)

・ 憎悪にはおもな要素が四つある。しつこく激しい嫌悪、否定的な二項区分のステレオタイプ化と一般化、共感の欠如、そして攻撃(闘争反応)を引き起こす根本の敵意である。……憎悪の表現はじつに幅広い。だがどの場合も裏に敵意が隠れている。憎悪を生む情動や感情はさまざまだ。欲求不満、妬み、悲嘆、苦痛、恐怖、

怒り、嫌悪感。憎悪のひそんだ激しい嫌悪感は、原始神経システムがある事象を生存か生殖、あるいはその両方を危険にさらす重大な脅威とみなしたしるしである。

人間の行動の研究から、差別と憎悪を生む根源が少なくとも八つわかっている。集団への適合度、アイデンティティ、乏しい資源の奪い合い、支配と優位、無力、恐怖と苦痛、地位、社会的役割である。このほぼすべてに、「われら対、彼ら」がある。(一五七頁)

これらの説明によると、憎しみは、辺縁系を含む脳の原始的な部分(「原始神経システム」)の働きから生まれます。辺縁系の中でも扁桃体を中心とする領域は、個々の対象の違いを認識するのが苦手で、対象を大づかみにしか捉えられません。つまりヘビと認識できても、それがはたして毒をもつヘビなのかどうか、といった個々の違いを把握することはできません。しかしこの部位は、高度な新皮質が支配する回路(「高等神経システム」)「意識の座」よりも早く反応し、生存と生殖の機会を拡大するチャンスをみつけて知らせる通報システムとして作動します。この意味でこの部位は「前意識警報システム」と呼ばれます。他方、高等神経システムによる選択は、知識と経験に基づく理性的選択であり、数分の一秒単位で仕事をする前意識警報システムと異なり、

ここには時間の制限がありません。したがって理論的には、ひとはこの高等神経システムを用いて辺縁系の衝動を抑制することができるはずですが、二つのシステムの発達期がずれているため、現実には複雑な現象が生じます。辺縁系は五歳ぐらいまでに完成するのに対し、前頭葉は二十代前半まで発達し続けます。

辺縁系を含む脳の原始的な部分(「原始神経システム」)の働きから生まれる原始的な心には、次のような特性があることが知られています(「第二章 原始的な心の正体」を参照)。

- (1) 「連結する思考」——原始的な心には、表面的な関連しかない現象を、深い因果関係で結ばれた現象とみなす傾向があり、ここから迷信やタブーが生じます。
- (2) 「一般化する思考」——原始神経システムは、対象の細かな違いをつかむのが苦手であり、早まって一般化する傾向がみられます。
- (3) 「分類する思考」——原始神経システムは、ステレオタイプに基づいて判断するばかりでなく、そのステレオタイプを二者択一的 방식으로評価します。つまり、良いか悪いか、味方か敵かといった単純な思考で評価します。

(4) 「個人化する思考」——これは、すべてのことを個人の感情が必要とするものに結びつけて考える傾向を指します。この

思考に促されると、他者の立場に立つてものごとを考えることができなくなり、批判されることに過剰に反応するようになります。

(5) 「過去や現在に執着する志向」——原始的な心は、あらゆるものを現在の状況や欲求や必要に基づいて解釈しようとしません。したがって将来を見通した複雑なシナリオを組み立てることができません。

(6) 「選択的記憶」——原始神経システムは、ひとつの状態にいつまでもこだわります。

(7) 「特殊状況への反応」——これは、特定の状況における感情や気分がすべてのことに影響することを指しています。

次に問題になるのは、原始神経システムと関連する「憎しみ」の働きを、高等神経システムによって抑制するためには、一体何をどうすればよいのかということです。ラッシュはそのための方法として次の「十の戦略」を提案しています(第二章 憎しみを根絶するための十の戦略)を参照)。

(1) 「明確にする」——怒りや苦しみの原因をできるだけはっきり特定することにより、扁桃体を含む原始神経システムが固定観念によって決めつけようとする働きを阻止することができます。この戦略は特に子供に対して有効です。

ゆるしとは何か

(2) 「共感する」——共感とは、他者の考え方や感じ方を理解しようとすることです。しかしそれは必ずしも、相手の考え方や感じ方を正しいと認めることではありません。他者への寛容の心は、教えることによって初めて身につくものであり、子どもには小さい時から他者を思いやるべきことを教える必要があります。

(3) 「伝える」——なぜ怒りや脅威を感じずるのかを相手に明確に伝えると、それらの気持ちを消すことができます。ここでも要点は「明確にする」ことであり、漠然とした一般論や固定観念に基づいてなされる言動は、むしろ怒りを煽り、憎しみを募らせる結果を招きます。これが「ヘイト・スピーチ(憎悪表現、憎悪を扇動する発言)」と呼ばれるものです。

(4) 「交渉する」——こちらの動機を伝えるだけでなく、建設的で明確な案を提示することにより、衝突や怒りの原因を解消することができます。

(5) 「教育する」——教育することにより、まったくの無知から生ずる憎悪と偏見を避けることができます。

(6) 「協力する」——共通の利益と目的を達成しようとすることにより、「われら」と「彼ら」という本能的分断を消すことができます。

(7) 「冷静に見る」——自分の反応が過剰反応であるのかど

五

うかを冷静に分析することにより、原始神経システムの働きを抑制することができます。

(8) 「追いつめられない」——「窮鼠猫をかむ」と言われるような、絶体絶命の状況は憎悪反応を誘発するので、なんとかして避けなければなりません。このような状態に陥る前に、特に自らの思いを「伝え」、「交渉」することが大切です。

(9) 「敵のふところに飛び込む」——これは、憎悪に捉われたいときにも、勇気をもって相手と顔と顔を突き合わせ、原始的な情動を抑制しようとする姿勢を指します。

(10) 「復讐ではなく、法の支配の下での正義を求める」——復讐心は過去に捉われており、それは「ゆがんだ意味体系」と結びついています。復讐は復讐を呼ぶため、この不幸な連鎖を法の力によって断とうとするのが「法の支配」です。強い反感や怒りは、それが原始神経システムに飲み込まれると、妄念と固定観念がつかまとう憎悪に代わり、激しい怒りと暴力となって現れます。しかしこれらの原始的な辺縁系の衝動も、高等神経システムの働きにより、有益な動機に作り変えることができます。したがって怒りが湧いてくるときには、その怒りが、憎悪の怒りなのか、それとも正義の怒りなのか、これを冷静に見極める必要があります。

これまでの記述から推察されるとおり、ラッシュユによると、人

間の思考と情動と行動は、進化の過程で、原始神経システムと高等神経システムがその支配権をめぐってせめぎあう場となっており、後者の能力が発揮されるためには絶えず適切な教育と訓練が必要になります。したがって憎悪を乗り越えるための十の提案も、常に意識的に学習する必要があります。

今回紹介したのは、『ひとはなぜ「憎む」のか』のほんの一部に過ぎず、全体の構成は次のようになっています。興味深いテーマが並んでおり、その基本的発想を理解するならば、必要に応じて拾い読みをすることも可能です。「第一章 感情とは何か——感情と行動のメカニズム」、「第二章 憎しみを根絶するための十の戦略」、「第三章 敵と味方を分ける本能」、「第四章 原始的な脳のしわざ」、「第五章 戦争と集団殺戮はなぜ起こるのか」、「第六章 人類の心の発達」、「第七章 自己嫌悪と自殺」、「第八章 性差別と人種差別」、「第九章 社会に広がる憎悪のメッセージ」、「第十章 憎しみが渦巻く職場」、「第十一章 愛と憎しみはどんな関係か」、「第十二章 荒れる子供たち」、「第十三章 原始的な心の正体」、「第十四章 復讐ではなく正義を求めよ」、「第十五章 共感の世界を変えるか」、「第十六章 知恵ある未来のために」。

II 「ゆるし」は「選ぶこと」

次に取り上げるのは、ロバート・D・エンライト著『ゆるしの選択——怒りから解放されるために』（河出書房新社、水野修次郎監訳、二〇〇七年：Robert D. Enright, *Forgiveness is a Choice*, 2001）です。著者はウイスコンシン大学の心理学の教授であり、「国際ゆるし研究所」の創設者でもあります。

本書は三部（第一部 ゆるしは選ぶこと」「第二部 ゆるしのプロセス」「第三部 より深いゆるし」）から成り、第一部は三章から、第二部は八章から、第三部は四章からそれぞれ構成されています。

邦訳で三七〇頁を越えるこの書物を読みとおす気になるかどうか、それはこの第一章（「ゆるし——自由へと開かれた道」）の読み方にかかっています。その難しさは、内容ではなく、複雑な展開の仕方にあります。最初に「三人の子どもをもち、三八歳になるメアリー・アン」のケースが紹介され、次に本書の執筆の意図が掲げられ、さらに彼女のケースを跡づけながら、「ゆるし」を肯定的に評価する心理療法家たちの所見を引用しているからです。しかもこれで終わらず、それに続いてこれらの心理療法家たちと著者の研究方法の違いが強調され、第一章は「メアリー・アンのその後」の小見出しをもって閉じられています。

ゆるしとは何か

このような方法をとった結果、読者のうちにイライラ感が生じることが著者も十分承知しており、続く第二章の冒頭では「早く説明してくれという人もいられるかもしれませんが、著者は自らの姿勢を崩さず、第三章では著者の与える「課題を終了した人だけが、この本を先に読み進めてください」と語り、第四章ではこう勧めています。「この章の最後と第五章から第十章までに記載されていることを学習するために、自分の速度に合わせて日記をつけることを考えてください。日記であなたのことを物語るのです」と。したがってこの本とつきあうには、相当の覚悟が必要になります。これは、「ゆるし」の問題は、知的に理解することによって簡単に解決できるようなものではなく、著者が繰り返し強調しているように長い「プロセス」を経て、ようやく新しい次元が開かれると考えているためです。

第一章において、本書の執筆の意図および心理療法家の立場との相違に言及している部分を抜粋しておきますので、ゆっくり読んでみてください。

・本書『ゆるしの選択』はメアリー・アンのような人のためのセルフヘルプの本（他者による援助ではなく自力で自分を援助する

ための自助本)です。怒り、憤慨、終りのないように思える破壊的な人間関係というパターンの渦に巻き込まれ、そこから抜け出す方法を探している人のための本なのです。一九八五年、ウィコンシン・マディソン大学の人間発達研究グループによって、ゆるしに関する集中的な研究が開始されました。私(R・D・エンライト)はそのグループの一員でした。そして、この本はその研究結果によって生まれました。この研究は非常に実り豊かなもので、一九九四年にはグループを拡大し、ゆるしの理解やゆるしの決心をするための援助を目的とするNPO(非営利)組織「国際ゆるし研究(the International Forgiveness Institute)」を設立しました。

次に、ゆるしについての科学的研究に基礎を置くプログラムを紹介しましょう。このプログラムの目的は、読者の皆さん、つまりゆるす側に利益を与えることにあります。ゆるすというプロセスを選択すれば、怒り、憤慨、苦痛、そしてそれらの感情に伴う自己破壊の行動パターンから解放されて、自由になれるのです。あなたの家族に受け継がれてきた怒りや苦痛を子どもや孫の世代に伝達する義務はないのです。

もちろん、ゆるしのプロセスは、すべての人の問題に効果があるとは約束できません。このような主張はばかげたものです。万能薬は存在しません。それにもかかわらず、私は多くの人がびつくりするほど変化するのを目撃してきました。(一八頁以下)

・ゆるしの研究グループは、ゆるしをセラピーや教育に用いた場合の科学的検証を実証しました。主要な宗教を探求し、哲学書を読み、セラピストやカウンセラーと話し合いをしてきました。完全とはいえませんが、一五年間の研究によってゆるしによる効果を証明する十分な証拠を見つけたのです。そこで、怒りや憤慨にとらわれていて、それから解放されたいと欲する人たちに、私たちの知識を提供することができるようになったと思うのです。(一九頁以下)

・ゆるしを研究し、本を出版し、講演をするのは、私の研究領域である道徳性の発達研究に大きな不満を感じていたからです。私がおもうには、大学の研究環境の中で道徳について研究しても、一般の人をわくわくさせるものにならないし、人々の人生を変革させる研究課題とはなりません。しかし、道徳性発達の側面であるゆるしは、人々の人生を永遠に変革させることができるのではないかと思えるのです。(二〇頁)

・ウィスコンシン・マディソン大学での私たちの目標のひとつは、ゆるしの効果を科学的に証明することでした。心理療法家たちは、詳細なケース歴を提示しました。しかし心理療法家たちの観察は、心理療法そのものに深くかかわっているので、それによって影響

されている可能性があります。心療家たちは、統制群（ゆるしのセラピーをしないグループ）と実験群（ゆるしのセラピーをしたグループ）を比較した研究をしていません。

科学者の観察は、心理療家家それとは違います。例えば、科学者は自分の印象が結論に与える影響を最小限にしてデータを収集します。対照的に、心理療家家がどのような人であるかは、心理療法プロセスの一部となっているので、客観性を保つために心理療家家その人を排除するというわけにはいきません。

理論を科学的に検証するためには、研究者は統制された状況を設定する必要があります。そこで、私たちは特定の怒りを経験している人たちを集め、二つのグループに分けました。私たちは、その一グループのみにゆるしについての教育をし、ゆるしを促しました。この二グループを、実験前と後でテストし、その結果を比較しました。次に、発見したことを確認するために、統制群にゆるしの教育を実施し、再びテストしました。

私たちの研究結果は、とても影響力が強いもので、ゆるしのプロセスへと進んだ人たちは、心理的により健康になることを、私たちは証明することができました。科学的な研究によって、ケース歴や一人称で書かれた記述は本当のことでゆるしには効果があると証明しました。（三二頁以下）

ゆるしとは何か

以上の記述から、本書の性格が明らかになります。怒りと憎しみを感じ続けることは、自らを独房に閉じ込めておくことに他ならず、ゆるしは、その閉ざされた門を開けるひとつのカギであるというのです。しかもこのカギを用いるかどうかは「自らの選択」にかかっているとされています。特に注目しなければならぬのは、「ゆるし」は、そのための教育がなされているかどうかによって、異なる結果を招くとする結論です。これは、ラッシュが「憎しみ」を乗り越えるには、やはり教育が不可欠であることを指摘していた事実を思い起こさせます。本書の第十三章の標題は「子どもたちがゆるすことができるように援助する」となっています。著者の研究領域はもともと道徳性の発達にあり、ゆるしもこの道徳性発達の側面として捉えられています。

第二章（「ゆるしとは違うもの」）の最初の小見出しは「ゆるしの定義」になっており、著者たちは、彼らの研究のガイドとして英国の哲学者ジョアンナ・ノースの定義を採用しています。ジョアンナ・ノースは「ゆるし」をこう定義しています。

・ 他者によって不当にも傷つけられた場合、その加害者に対する怒りの感情を乗り越えたときにゆるすことができます。これは、怒りを感じる権利を否定するものではなく、その代わりに、過ち

九

を犯した行為者に、憐憫、慈悲、愛を提供するものです。加害者は必ずしもこのような恩恵に浴する権利はないことを了解しながら、ゆるしを実践します。(三九頁)

著者によると、この定義により、「第一に、被害を与えることは不当であり、将来も不当であり続けることを承認すること。第二に、道義的にも怒る権利があり、人は私たちを傷つける権利がないという主張を支持するのは公正であること。私たちには、人としての価値を認める権利があること。第三に、ゆるすということとは、私たちの権利」(四〇頁)を放棄すること、つまり怒りや憤りの感情を放棄することであることが明らかにされています。ゆるしは、必ずしもそうすることに値しない加害者に対する慈悲の行いであり、加害者がどのような人物であるのか分からない場合にも、相手を人間社会の一員として遇することです。この行為により、両者の関係は質的な変化を経験する可能性へと導かれます。ゆるしのプロセスは理論的なものというよりも、常に逆説的なものなのです。

続いて、著者は、常識的に「ゆるし」と考えられている事柄と、著者のいう「ゆるし」のちがいに言及し、さらに「ゆるし」と「和解」を区別すべきことを論じています。例えば、ゆるしは、「起きてしまったことを受容すること」、「怒ることをやめること」、

あるいは「他者に対して中立の立場をとること」と同じではありません。それらは「ゆるし」のプロセスのひとつではあっても最終ゴールではないからです。また「ゆるし」は次のようなものでもありません。つまり「大目に見る、あるいはなかったことにすること」、「忘れ去ること」、「相手の行為を正当化すること」、「冷静になること」、「他者をコントロールするために、駆け引きとしてゆるすこと」でもありません。

ゆるしと「和解」の関係については、こう記されています。「ゆるしは、和解のプロセスの第一歩です。ゆるしのない和解は休戦状態であっても武装を解除していませんので、他者を襲撃する機会をねらい、戦闘を再開するチャンスをねらい、お互いの側の非武装地帯をパトロールしているようなものです。真実の和解には、両者からのゆるしが必要になります。……和解は、別離の後に一緒になる行動です。一方、ゆるしは片方の側が個人としての道徳的行為として始まります。それは、人間の心の内側とする目に見えない決心なのです。ゆるしが成熟するにしたがい、ゆるしは危害を与えた人へと外側に流れていくのです」(四六頁以下)。そして第二章の最後は、「ゆるしは、和解への道を開きます。しかし、それによって信用できない人を信用する必要はありません。加害者が改悛していないとしても、あなたはその人をゆるし、あなたの人生に平和と健全さを取り戻すことができるのです」(六一頁)

という言葉で結ばれています。

第一部の終りに位置する第三章(「ゆるしの理由——そしてゆるさないことの結果」)は、「ゆるしの定義」にでてくる「怒りの感情」があまりに根深いものであるときに生じる結果と、これに対する従来の対処法の限界を指摘しています。著者によると、怒りは「感情や思考が含まれた情緒」(六六頁)であり、「飲酒のようなものです。少々ならば益がありますが、過ぎると問題になり、習慣性のある依存症にさえなります。……怒りの感情には、私たちの情緒資源の中でも重要な役割があります。しかし、すべての怒りの感情が健康的というわけではありません」(六五頁)。そこで著者はまず、根深い受動的な怒りが「血圧」や「心臓病」に与える影響に関する研究成果を紹介し、怒りは健康をむしろむこうを指摘しています。次に、根深い怒りが家族のなかに広がると、それは離婚の原因となりやすく、子どもたちの人生もその怒りの連鎖の渦に巻き込まれて行くこと、さらに社会的不正義に対する怒りは世代から世代へと伝わって行くことを論じています。

これまで、この激しい怒りに対処するために様々な方法が提案されてきましたが、著者はそれらを七つに分類し、一時的な怒りに対する一時的な解決方法としては有効かもしれないが、いずれも「ゆるし」に言及していないと批判しています。その七つとは、

「カタルシス(浄化・排泄)」、「リラククス」、「コントロール」、「気をそらすこと」、「感情・思考・行動を変化させること」、「不合理な思考方法を合理的なものに修正すること」、「人格を変容させること」を推奨する方法です。各方法の内容については、本文の説明に譲るほかありませんが、著者によると、いずれの方法も怒りの症状とその克服に捉われたままであり、怒りの根源に光を当てようとしていません。これに対し、この怒りの根源に焦点をあわせて、問題を克服しようとしているのが著者のいう「ゆるしのプロセス」です。

以上が第一部の主な内容です。続いて第二部および第三部の紹介に入りたいところですが、紙幅の関係で、割愛せざるをえません。ここでは、全体の章立てと、「ゆるしと教育問題」を考える上で極めて示唆的な第十三章の内容の一部を紹介することに留めておきます。

全体の構成は、次のようになっています。

第一部「ゆるしは選ぶこと」——「第一章 ゆるし——自由へと開かれた道」、「第二章 ゆるしと、ゆるしとは違うもの」、「第三章 ゆるしの理由——そしてゆるさないことの結果」。

第二部「ゆるしのプロセス」——「第四章 ゆるしへの旅立ちに必要な地図と道具」、「第五章 怒りの感情があることを認め

る」、「第六章 根深い怒りに直面する」、「第七章 ゆるすことへの積極的関与」、「第八章 新たな視点を得る」、「第九章 肯定的な気持ち、考え、態度を築き上げる」、「第十章 発見と感情の牢獄からの解放を経験する」、「第十一章 「私はあなたをゆるします」と言うこと」。

第三部「より深いゆるし」——「第十二章 ゆるしを進めるために役立つ質問」、「第十三章 子どもたちがゆるすことができるように援助する」、「第十四章 ゆるされるのを待つ」、「第十五章 和解する」。

ロバート・D・エンライトは、第十三章において「あなたはどのようにして子どもたちにゆるすことを教えますか。この質問にどう答えるかによっては、次の世代の健康状態に重要な影響があるでしょう。私は、ゆるすことを子どもたちに教えることは可能だというだけでなく、教えるべき義務があると確信します」と語り出します。さらに続けて「私たちがゆるしのプロセスを始めるとき、怒りを心に抱き、それを衰えないように保つことは自己破壊的であることを学びます。最も有害な怒りの多くは、子どものときに傷ついたことで腹を立て、そしてゆるさなかったことから始まります。いったんゆるしを経験した人々が自分の子どものことを見て、長年の怒りから生じた無用な苦しみから子どもを保護

したいと思うのは当たり前のことだと私は気づきました(二六七頁)と自らの思いを率直に語っています。

たしかに私たちもこの思いを共有することができます。しかし冒頭の「どのようにして」という問いに対しては、「どうしてよいかわからない」というのが現実ではないでしょうか。

本章において著者は、長年の「ゆるしに対する理解度」の研究から、「子どもたちのゆるしに対する考え方」の六つの型を導きだし、「物語を通して一〇代の子どもの理解を育成する方法」まで論じています。その六つの型とは、彼らの成長と共に現れる次のような「ゆるしの理解」です。

(1) 「九—一〇歳」——「同害報復的ゆるし」

これは、「目には目を」とする思いであり、復讐とゆるしを同じものと考えています。

(2) 「一〇歳位」——「条件的、弁償的ゆるし」

これは、謝罪があればゆるすことができるとする思いであり、この場合、謝罪は必要条件とみなされています。

(3) 「一一—一五歳」——「同調圧力的ゆるし」

これは、家族や友人の理解が模範的モデルとなるケースであり、本人は「ゆるし」に関しまだ自分自身の考えをもちあわせていません。ゆるしに否定的な仲間が多い場合には、自らもゆるしに難

色を示し、その反対に周りがゆるしに肯定的な場合には、自らもゆるしを実践しようとします。この年代の青少年にとって大切なのは、誰を模範的なモデルとするかということです。

(4) 「青春期の後半」——「権威のある人物の意見や励ましに對しアンビバレントな態度をとる」

思春期の若者は総じて身近な権威主義的人物に反抗的な態度をとりませんが、他方で、より大きな組織を代表する権威者には耳を傾けようとします。彼らは、特にゆるしの動機や基準について、きちんと説明することができ人物を求めています。

(5) 「成人」——「社会の調和としてのゆるし」

もう少し年長の若者と成人の間には、ゆるしの条件(例えば、謝罪、あるいは友人、家族、権威者の励まし)よりも、ゆるしの後に起こる肯定的結果について考える傾向が強く現れてきます。つまりゆるしの社会的影響も考えるようになります。

(6) 「成人」——「愛としてのゆるし」

これは、加害者を、その行為にもかかわらず、敬意を払う価値のある人間とみなすことから生まれる態度であり、ゆるしや愛は無条件的なものと理解されています。

III 「ゆるし」と靈性

三番目に紹介するのは、ジョン・ポリセンコ著『愛とゆるしの心理学』(中塚啓子訳、日本教文社、平成八年: Joan Borysenko, *Guilt is the Teacher, Love is the Lesson*, Warner Books Inc. New York, 1990)です。著者は心理学者であると共に心理療法家であり、独自の身心相関セラピーを実践している女性です。

本書は三部(第一部 心の気づきのはじまり)、「第二部 精神性・靈性のはじまり」、「第三部 愛と慈しみ——サイコスピリチュアルな成長の咲かせる花」から成り、第一部は四章から、第二部は三章から、第三部は三章からそれぞれ構成されています。著者はこの三部構成について以下のように述べています。——なお「精神性・靈性」と「慈しみ」は spirituality と compassion の訳です。

・「私とは何か?」という問いは、知識の三つの領域「引用者註、この三つとは心理的領域、精神的・靈的領域、関係の領域を指す」にまたがるものであり、本書もそれにそって構成されています。まず第一部では、個人的・心理的な歴史に制限されている時間と空間をもったこの「《現象の世界》」を扱い、第二部では、気づいていようといまいと、私たちが「今」生きている魂と精神・靈の

「《永遠の領域》」を検討します。そして第三部では、私たちが慈しみを拡げ許しを實踐する中で、人間の心理的そして精神的・霊的な自分とは何かを私たちに知らせてくれ、人間同士の絆を強めてくれる、「《関係の領域》」を探ります。(八頁)

この記述からわかるとおり、これまで取り上げた二人の立場と大きく異なり、ポリセンコは「現象の世界」だけでなく「永遠の領域」を扱っています。彼女にとって時間と永遠は不可分の関係にあり、日常の経験のなかでこの根源的關係に気づき、不健康な恥の感情と不健康な罪悪感を取り越えて「真の自己」とのつながりを回復する道を提示すること、それが本書の狙い입니다。

この恥の感情と罪悪感の問題を扱っているのが第一章(「心身と魂——心理的・霊的にみた罪悪感」)と第二章(「罪悪感、恥の感情、自己尊重」)です。恥の感情と罪悪感はすべて否定されるべきものではなく、それらが「自己への気づきを増し、困難を解決し、さらに人間関係を発展させ精神的成長を促す(四八頁)」すかぎりにおいて、健康的なものです。これに対し「不健康な罪悪感私たちに、「自分には何の価値もないんだ」と繰り返し言わせ続け、その状態に閉じ込めてしまいます」(同)。

恥の感情は生得的なものであり、この事実は、それが生存のために必要であることを示唆しています。つまり社会的動物として、

「負けを認めます」と公表するようなメカニズムが備わっていることにより、人は社会的規範や約束を破ったことに気づきます。したがって恥を感じる能力があることは、その人が正常な適応性をもつことを示しており、その能力は、健康な罪悪感や良心、慈しみ、共感力を伸ばすためにどうしても必要なものです。

ところが、この恥の感情が、境界を越えた際に警報を鳴らすという本来の役割を越えて、慢性的なものとなると、それは不健康なものになります。例えばそれは、疎外感、劣等感、無力感、絶望等を感じて、絶えず悩むような状態を引き起こします。

では、不健康な罪悪感とその原因である恥の感情から解放されるには、「真の自己」に至るには、どうすればよいのでしょうか。それには、まずその症状に気づく必要があります。それらが私たちの思考や感情や行動を歪めていることに気づかなければなりません。ポリセンコは、不健康な罪悪感の存在を示唆する特徴として、次の二十一の傾向を指摘しています。個々の詳しい内容は本文に譲らざるをえませんが、ごく簡単に傾向とその解説を列挙しておきます。

「不健康な罪悪感を示す二十一の特徴」

(1) 「献身しすぎる」——ここには、献身すれば、愛がえられるという幻想があるのかもしれませんが。過度の献身は、苦痛を

避けるひとつの手段となっている可能性があります。

(2) 「心配の仕方だけは知っている」——愛されるという経験がないために、恐怖心だけが残り、安全を感じられず、自己破壊的な思いを投影しているのかもしれない。

(3) 「人を助けてあげなくてはいつも思っている」——これはメサイア・コンプレックスの存在を示唆しています。この人自身が助けを求めているのでしょう。

(4) 「自分のことでいつも謝っている」——あたかも他の人びとが自分の魂の判定者であるかのごとく感じているのかもしれない。

(5) 「夜中に心配ごとで目を覚ます、あるいは何日も、何週間も心配ごとで悩まされる」

(6) 「自分自身をいつも責めている」——自分にはいろいろな欠点があるという思い込みがあるのかもしれない。

(7) 「他人が私をどう思っているか、気になって仕方がない」——このような人は、自分の値打ちを自分で決める権限を他人に委譲してしまっているのかもしれない。

(8) 「他人の怒りに敏感すぎる」——幼い頃の私たちは、いつも周りの人びとから愛されていなければ自分は生きていけないと思っていたのですが、「今でも私たちの心の奥深くにいるその怖がりやさんは、自分の生殺与奪の権限はあの怒っている人が

握っていると信じています」(六七頁)。

(9) 「私は他の人が考えているほど善人でなく、誰からも馬鹿にされるだけである」——私と同じ境遇にある人はみな、自分より頭がよくて、競争力があると思ひ、空しさで混乱を感じているのかもしれない。

(10) 「私は玄関マツトのようなものである」——このような人は、よい人だと思われようとして、余計なものまで引き受け、遂には周りの人を「迫害者」のように感じているのかもしれない。これは殉教者コンプレックスともいわれます。

(11) 「自分の時間がまったくない」——こう嘆くのは、自己尊重の意識が低く、他人のニーズを常に優先させてしまうタイプの人です。

(12) 「常に他人の方が自分より優れているように思える」——「あれかこれか」という判断しかできず、嫉妬心や競争心を異常に燃やしてしまう人も、このなかに入ります。

(13) 「私が好きな言葉は、「:をしないでならぬ」と「:すべきだ」——このタイプの人は、「存在する (being) 人間」というよりも「行動する (doing) 人間」になっています。

(14) 「他人からの批判に弱い」——これは、ありふれた質問も、辛辣な攻撃のように感じられ、すぐに守りの姿勢に入ってしまう人のケースです。ここには、相手から拒否されたり無視され

たりすることへの恐怖心が働いています。

(15) 「私は完全主義が大好き」——試験で九十点をとっても満足しないケースです。この完全主義には、子ども時代の恐怖や願望が強く影響している可能性があります。

(16) 「自分は利己的ではないか」といつも心配である」——これは、他者への関心と自分への関心のバランスが取れなくなっていることのサインです。

(17) 「私は人にお願いたくなく、頼みたくもない」——罪悪感のある人は、自分が受け取るよりも、与える方が楽であると感ずるようです。「受け取ることを拒否するのは、ひそかな優越感があるためかもしれません。

(18) 「相手の言葉を率直に受け取ることができない」——これは、自分の完全主義が充たされた時点で、あえて自分で何らかの欠点を見いだそうとするケースです。

(19) 「私は人間失格者である、きつと罰せられるにちがいない」——精神的・霊的悲観論者は、自ら進んで恐怖と無気力と罪の意識のとりことなり、超越者を審判者として理解しようとしません。これに対し精神的・霊的楽観論者は、神は内在する愛であり、人生に起こる悪い出来事も人間の魂の成長の機会であると理解しようとしています。

(20) 「いつも身体の調子が悪い」——罪悪感と病気の間には、

深い関連があります。

(21) 「私は「ノー」と言えない」——罪悪感をもつ人は、何とかして他者に認めてもらおうとして、自分のための時間と空間をもつことを必要以上に恐れます。

第三章（「内なる子どものドラマ」）と第四章（「インナーチャイルドの傷を癒す」）は、「真の自己」とは何か、そしてなぜこの「真の自己」は「偽りの自己」になってしまふのか、さらにこの状態から解放されるためには、まず何をしなければならないのかを論じています。

著者はすでに第二章の註において「真の自己」と「いつもの自己」の対比を一覧表にしているのですが、ここでその概要を紹介しておきましょう。最初に記されているのが「真の自己」の特徴であり、括弧の中に記されているのが、それに対応する「いつもの自己」の特徴です。ゆっくり味わいながら対比してみてください。著者の狙いが明確に浮かび上がってくるはずですよ。

(1) 「純粋な自己」(「嘘の自己、仮面」)、(2) 「本当の自己」(「いつもの自己、ペルソナ(外界に合わせるための自分)」)、(3) 「真正銘の自己」(「……であるかのような」人格)、(4) 「自発的に行動する」(「策を労する」)、(5) 「発展的、愛に満ちている」(「心が狭く、恐怖にかられがちである」)、(6) 「惜しみなく他に与える、

意志の疎通ができる」「自己に限定しようとする」、(7)「自己や他者を受け入れる」「嫉妬深く、批判的で理想化しがち、完全でないと気がすまない」、(8)「慈しみにあふれている」「他人に動かされ、まわりに順応しすぎる」、(9)「無条件の愛」「条件つきの愛」、(10)「適度な感情、自発的感情、その場での怒りなどの感情を自由に感じられる」「怒りの感情をいつまでも覚えていて、それを否定するか、隠そうとする」、(11)「自己をきちんと主張できる」「攻撃的ないし受動的な態度をとる」、(12)「直観的に判断する」「何ごとでも理屈でかたづけようとする」、(13)「内なる子ども(インナーチャイルド)との接触がある、子どものようになることができる」「親・大人としての意識が過剰である、「親」というシナリオに縛られている」、(14)「遊びや楽しみは欠かせない」「遊びや楽しみを避けようとする」、(15)「よい意味で傷つきやすさがある」「常に強いふりをする」、(16)「本当の意味で強い」「限られた場面においてだけ強い」、(17)「信頼する」「不信感が強い」、(18)「養い、育てられることを楽しむ」「養い、育てられることを避けようとする」、(19)「自己を明け渡すことができる」「自己を過剰にコントロールし、引込みがちである」、(20)「自己に没頭する」「自己を正当化する」、(21)「自己の無意識に対して開かれている」「無意識的要素をブロックしようとする」、(22)「自他の一体感を忘れない」「自他

との一体感を欠き、孤立感を覚えている」、(23)「自由に成長する」「無意識に突き動かされ、苦痛にみちた行動パターンを繰り返しがちである」、(24)「自分だけの自己をもっている」「皆に知られている自分しかない」。

成長するにつれ、人はさまざまな嫉と要求に答えようとして、双方のナチュラルチャイルドないしインナーチャイルド(真の自己の核)によるつながり、つまり喜び、安らぎ、愛、そして信頼にみちたつながりを失い、恥の感情の中で生きざるをえなくなり、特に子どもの場合、その恥の原因が何であれ、悪いのは自分だと決め込んでしまいます。これは恥と共に、自己防衛的な生き方が始まることを意味しており、子どもは「仮面」をつけて、恐怖と不安と無力感を隠し、自らの安全を確保しようとしています。この時に経験したはずの痛み、苦しみ、怒り、悲しみなどの感情は、「影」として「私たちが後ろに引きずっている大きな袋」(一〇九頁)の中に投げ捨てられてしまいます。それは両親や教師から嫌われ、禁止されてしまった私たちの一部です。したがってこの影は、一見、弱々しく感じられるとしても、本来は、ナチュラルチャイルドの活気あふれるエネルギーを含んでいます。仮面はこの「影」の存在を前提として成り立っており、この「影」を解き放つことにより、仮面をかぶらずに生きて行くことができるように

なります。

著者ポリセンコの最終目標は、先に上げた「不健康な罪悪感を示す二十一の特徴」を手がかりとして、各人の仮面を支えている「影」の内容を明らかにし、つまり「後ろに引きずっている大きな袋」を開け、そのひとの「真の自己」を解放することです。その具体的方法や、この作業の意味についての議論は、第二部「精神性・霊性のはじまり」と第三部「愛と慈しみ」において展開されています。これらの内容も紹介したいところですが、やはり紙幅の関係で割愛し、各章の表題を記すことに留めざるをえません。その表題は次のとおりです。

第二部「第五章 私とは？」、「第六章 精神的・霊的な再検討——神秘体験者が押し入れに隠れる国」、「第七章 宗教的な罪悪感から、精神と霊的オプティミズムへ」
 第三部「第八章 許し」、「第九章 関係」、「第十章 精神性と霊性のエクササイズ」

最後に、「許し」に関する著者の理解の一部を紹介しておきましょう。第八章において彼女はこう語っています。

・「許し」とは慈しみ「compassion」、思いやれる心、共感できる心」
 を実践するプロセス、またそうした態度の両方を指しています。

許しのプロセスにおいて、私たちは自分の間違いから生み出した苦しみ、あるいは他の人々に傷つけられたために受けた苦しみを、心理的そして精神的・霊的な成長の糧へと変えます。そして許しの態度を身につけた時、私たちはそれまで自分の自我がたえず必要としていた自己への批判の必要性を解き放つてしまうので、幸福と落ち着きを得ることができます。(三〇八頁)

・《許しはまったく私たち自身の問題であって、相手の態度しだいでという条件つきものではありません》……

自分を許し、相手を許す。この二つの許しは並行して行われるべきプロセスで、それなりの時間が必要です。(三二二頁)

こう述べた後、彼女は(A)「自分自身を許すためのステップ」として六段階の行程を、また(B)「他の人を許すためのステップ」として同じく六段階の行程を上げています。それらは次のとおりです。(A) ①自分の行為は自分で責任をとる。②誤りの内容をまず神に、次いであなた自身に、そして他の人に告白する。③あなたの長所を見つけたらして憂鬱を克服する。④自分や他者を傷つけないかぎり、可能なところから率直に自分の誤りを正していく。⑤神に助力を求める。⑥それによって何を学んだのかを考えてみる。(B) ①自分が執着している問題は、自分自身に責任がある

ことを認める。②問題の中身を自分に、相手に、そして神に告白する。③自分と相手の双方の長所を見つける。④そのために何か特定の行動をとる必要があるかどうかを考える。⑤神に助力を求める。⑥その問題によって自分は何を学ぶことができたのかを振り返ってみる。

これまでに紹介した著者の考え方を前提とするならば、これらの段階は、私たちの傷ついたインナーチャイルドを癒す行程であることは、容易に想像することが出来ます。この行程の到着点は、「誉めること・誉められること、非難すること・非難されることへの執着」から解放されることであり、この先に、真の関係の回復のためのステップが待っています。それは、「私は私として存在し、あなたはあなたとして存在すること」、「私とあなたは、共に男性性と女性性をもち、そのバランスは互いに異なること」を確認しつつ、進む行程です。具体的には、①問題の存在に気づき、認める、②互いの非難合戦を克服する、③互いの傷ついたインナーチャイルドを探し出し、慰める、④互いの男性的側面と女性的側面の間に心の交流の橋をかける、というプロセスになります。それは、私とあなたは、相互の違いを通して互いに豊かになり、二人でひとつの全体を形成しつつあることを確認する歩みです。

この書物を読み終えた後に残るのは、そもそもあのインナー

チャイルドとは何者なのか、告白すべき神とは誰のことか、という問いでしょう。インナーチャイルドは、「普遍的な宇宙意識すなわち生命力」（二一七頁）であり、生まれたままの魂とも説明されています。さらにその生命力が人間もとへ到来する事情は、次のような神話と物語を用いて説明されています。

・私たちは「栄光の雲をたなびかせながら」、幼子として遠い宇宙からこの世界にやって来た。その時私たちは、哺乳動物からうまく引きついできた食欲、十五万年におよぶ樹上生活が伝えてきてくれたのびのびとした自発性、さらに五千年にわたる部族生活が伝えてきてくれた怒り——つまり三六〇度、全方向への輝きを携えてやって来たのだ。そして私たちはこれらの贈り物を自分の父母にさし出した。しかし、彼らはそれらを望まなかった。彼らが好きなものは、行儀のよい女の子や利口な男の子だった。これがドラマの第一幕目である。（二一五頁）

ポリセンコは、現代の神話学の知見やユングの深層心理学を用いながらこの神話と物語を肯定的に受けとめており、彼女の思想類型はいわゆる「神秘主義的思想」に近いと考えることができま

す。では伝統的諸宗教に対しては、どのような立場をとっているのでしょうか。それは、これまでの記述からも推測されるとおり、

批判的であり、伝統的諸宗教が精神的・霊的ペシミズムを説くかぎり、それらを受け入れることはできないとされています。しかし彼女は どうしてそのような考えるのでしょうか。どのような家庭環境で育ったのでしょうか、その宗教教育的環境はどうなっていたのでしょうか。本書には次のような、注目すべき記述が出てきます。

・七歳になった時、私は一家が通っていたユダヤ教正統派寺院の日曜学校に通うことになりました。最初の一日が終り、家に帰った時のことを今でも懐かしく思い出します。バスの中はクラスメートでいっぱいでしたが、帰りの道すがら私はいつになく静かに、空想にひたっていました。ヘブライ文字のアルファベットが示す異国風の美しい曲線は私を神秘と畏れで魅了し、まるで魔法の秘密や古代の英知そのものに思われました。何千年という年月のあいだ唱えられ続けてきた祈りの柔らかかなリズムが私の耳の中でこだまして、人類の文明の誕生にはじまる古い伝統と私とを結びつけました。そこには自分と過去をつなげてくれる、深い根のようなものが感じられました。当時の私にはまだ十分に理解できなかったとしても、心は感激に満たされていました。(二〇三頁)

この記述が示唆するとおり、彼女はユダヤ教の家に生まれ、そ

の宗教教育を受けています。したがって、後に、彼女が正統派ユダヤ教に対して距離を置くようになったとしても、彼女の思想を論ずる際には、この重い事実をふまえて議論をする必要があります。彼女のいう「不健康な恥感情」や「不健康な罪悪感」に対する批判は、実質的にはユダヤ教を基本とするヘブライズム思想に対する批判となっています。さらに彼女のいう「真の自己」についても、それがヘレニズム思想に由来するのか、それともユダヤ神秘主義に由来するのか、あるいはそれらとも異なるものに由来するのか、これらも真剣に問われなければなりません。

IV アーミッシュの赦し

はじめに

次に紹介するのは『アーミッシュの赦し——なぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』(青木玲訳、亜紀書房、二〇〇八年: Donald B. Kraybill, Steven M. Nolt, David L. Weaver-Zercher, *Amish Grace: How Forgiveness Transcended Tragedy*, John Wiley and Sons, 2007) です。本書は、二〇〇六年一〇月二日、ペンシルベニア州ニッケル・マインズ近くのアーミッシュ学校で起こった「銃と怒りで武装した」犯人による乱射事件と、それに対する被害者たちの「赦し」という「衝撃的」対応を巡る共同研

究をまとめたものです。しかしその内容は専門書というよりも、あたかもドキュメンタリーを読んでいるかのような印象を与える構成になっています。まず第一部の第一章から第五章は、乱射事件とその後の対応を、第二部の第六章から第九章は、アーミッシュの生活の中で赦しがどのように実践されているかを、そして第三部の第十章から第十三章は、アーミッシュにかぎらず、私たちにとって赦しがどのような意味をもつのかを考察しています。

共同研究者となっているのは、ドナルド・B・クレイビル（ペンシルベニア州・エリザベスタウン・カレッジ特別招聘教授、社会学者）、ステイーブン・M・ノルト（インディアナ州・ゴシエン・カレッジ歴史学教授）、デヴィッド・L・ウィーバー・ザーヒャー（ペンシルベニア州・メシア・カレッジ米国宗教史学准教授）の三人です。この中でドナルド・B・クレイビルは、同大学にある「再洗礼派・敬虔派ヤング研究所」所長でもあり、その研究成果の一部は邦訳されています——『アーミッシュの謎』（杉原・大藪訳、論創社、一九九六年）と『アーミッシュの昨日・今日・明日』（杉原・大藪訳、論創社、二〇〇九年）。

本書の魅力のひとつは、ドナルド・B・クレイビルが、事件の起こった日の翌日、つまり二〇〇六年一月三日（火曜日）に現地に入り、普段は信仰上の理由で写真もインタビューも拒絶する人びとの「肉声」を丁寧に拾いあげ、その発言の背景にある宗教

と文化の歴史にも言及していることです。その結果、まさにその場にいるような臨場感が生まれ、読者はドキュメンタリーフィルムを見ながら、解説を聞いているような感覚に引き込まれます。見事な手法です。

この著作でもうひとつ見逃せないのが、「付録・北米のアーミッシュ」です。これは、ドナルド・B・クレイビルがすでに発表した文章を下敷きにまとめたもので、アーミッシュに関する基礎知識と全体像を確認するうえで、極めて有益な資料となっています。それは「アナバプテスト、アーミッシュ、メノナイト」、「家族、教区、居住区、所属教派」、「成長と多様性」、「オードヌング」、「若者」とルムシュプリンガ（Rumspringa 放蕩）、「生業の変遷」、「テクノロジー」、「政府との関係」、「汚点と美德」の九章から構成されています。

乱射事件

第二章は、乱射事件を起こすまでの犯人の動向と事件の顛末を記しています。

・ 月曜日の午前三時頃のこと、三二歳のチャールズ・カール・ロバーツ四世は、一八輪の牛乳運搬用トラックをニッケル・マインズ・オークションの駐車場に停めた。そこで自分の小さなピック

アップ「車輪が大きく、車高の高い小型トラック」に乗り換えると、一マイル半先のジョージタウンの自宅へ戻り、陽が上がるまで少しの間、睡眠をとった。彼は前日の夜六時から、トラックでアーミッシュとイングリッシュの農場を回り、ステンレスのタンクに入れてある牛乳を回収する仕事をしていた。……

ほぼ終日一人でいられるこの仕事は、引つ込み思案のロバーツに合っていた。相手から話しかけられない限り、めったに口をきかない男で、返事もたいていそっけない。義父にトラックの仕事を教わるまでは、大工をしていた。ささいなことでもよく腹を立てた。……ただ、処理工場の同僚の話では、九月の最後の週、彼はどういうわけか普段より落ち着いて、仲間と打ちとけた様子を見せていた。(二九頁以下)

・何時間か睡眠をとったロバーツが、妻のエイミー、そして三人の子供たちと一緒に朝食をとっていた。食後まもなく、エイミーはまだ一歳半の末っ子を連れて、……出かけた。……

ロバーツは、ジョージタウンの目抜き通りにあるモジュール式住宅からスクールバスの停留所まで、六歳と八歳の子を送りに行った。午前八時四十五分、子供たちにキスをしてお別れを言っている。……家のなかに、家族の一人ひとりに宛てた遺書を置いてくると、物置から道具を運び出し、ピックアップの覆いのある

荷台に積んだ。この車は、隣で暮らす妻の祖父からの借り物だ。この一週間、物を買って込んで家の脇の納屋に仕舞い込んでいた。足りないものがまだある。……

プラスチック・タイを購入すると、牛乳回収車に残してきたノートに書きだした品がすべて揃った。九ミリ拳銃、一二ゲージ散弾銃、三〇・〇六ライフル、スタンガン、弾丸六〇〇発は、もう用意ができている。……教室に長時間立てこもるためだ。

すべて順調。ニッケル・マイنزには予定より少し早く着いた。ちょうど午前の休み時間で、子供たちは校庭で遊んでいる。……

午前一〇時一五分頃、エンマ「教師、二〇歳、教師歴二年」が子どもたちを呼び入れる。ロバーツはトラックを発進させ、ホワイト・オーク通りを学校へ向かう。開いている白い木製の門をくぐり、そのまま玄関先の小さなポーチを指す。……

ロバーツは……校舎に入り、拳銃を振り回し、全員、教室の前へ行って黒板のそばの床に伏せろと命令した。銃を見たエンマは、ほかの大人がまだ教室にいることを確かめると、母親と二人で横のドアから逃げ出し、……助けを求めた。午前一〇時三五分、九一一番の交換手が受けたのは、その農家の電話ボックスからの通報だった。(四四頁以下)

・大人たちは全員追い出された。ついで、男子生徒も全員表に出

された。(四七頁)

・悲劇が始まる直前、生き残った一人の少女によれば、ロバーツが一度だけ、計画を思いとどまったようなことをつぶやき、ドアに向かって行く場面があった。ところが、どういうわけかまた気が持ちを切り替え、少女たちに「こんなことをして」すまない、と謝ったという。生き残った少女たちによれば、彼はこう言っていた。

「俺は神に腹を立てている。だから、クリスチャンの女の子に罰を与え、仕返しするんだ」

午後一〇時四四分。農家の庭先から九一一通報を受けてからわずか九分で、三人の州警察官が学校に到着した。……さらに七名の警察官が現場に駆けつけ、学校を素早く包囲した。……交渉担当が、……銃を下ろすよう繰り返し説得した。

立てこもったロバーツは、携帯電話で妻を呼び出し、もう家には帰らない、皆に書き置きを残してある、と伝えた。神に腹を立てている、と彼は言った。それは、九年前に生まれた長女のエリーズが、生後わずか二〇分で死んでしまったためだ。……

警察が来て、少女に悪戯をする計画がだめになったと知り、ロバーツはさらに動揺した。午前一〇時五五分には、自分で九一一番に電話し、「少女一〇人を人質にとった。全員ここから出る。

ゆるしとは何か

……今すぐだ。さもないと、二秒で皆殺しにする。二秒だぞ。分かったか！」

それから、少女たちに向かって言った。

「娘の償いをさせてやる」

教室にいた一三歳の生徒二人のうち一人、マリアンが、ロバーツは皆を殺すつもりだと悟り、年下の子を何とか守ろうと思って、言った。

「私を最初に撃って」

そうすることで、他の子供を救い、自分が世話を焼いている小さな子たちへの義務を果たしたかったのだ。

午前一一時五分。警察は、散弾銃の銃声三発、続いて拳銃の速射音を聞いた。……床の上には、まるで処刑場のように、撃たれた少女たちが一列に横たわっていた。五人は瀕死の状態である。もう五人も重傷を負っていたが、頭を両手でかばい、転げ回ったため命が助かった。(四八頁以下)

・五人の少女の葬儀が行われたのは、事件の三日後と四日後だった。三組の葬儀——ナオミ・ローズ、マリアン、それにメアリー・リズとレーナ姉妹——は一〇月五日の木曜日に、アンナ・メイの葬儀は、一〇月六日の金曜日にとり行われた。(六五頁)

一一三

・その週の土曜日には、チャールズ・カール・ロバーツ四世の葬儀に、彼の家族と友人が集まっていた。(六八頁)

・乱射事件から一週間後、生き残った子どもたちのための授業が、近くのアーミッシュのガレージを借りて再開された。(六九頁)

・一〇月一二日の午前四時四五分。乱射事件の一〇日後、巨大なシャベルカーが校舎を壊し始めた。ものの一五分で、学校は跡形もなくなった。(七二頁)

これが、ニッケル・マインズのアーミッシュを奈落の底に引きずり込んだ乱射事件の概要です。犯人は、アーミッシュではなく、彼らのすぐそばに住み、彼らの生活の一部に関わっていたイングリッシュつまりアメリカ人でした。子どもたちの悲劇に、全米中が、そして世界が打ちのめされました。被害者たちのために多額の義捐金と見舞い品が寄せられ、イングリッシュの熱心な公的・私的支援活動をきっかけに、「アーミッシュとイングリッシュの間にある文化的な障壁」(五八頁)も、双方にとってかつてほど高くないと感ぜられるようになりました。

最初、人びとの心を揺さぶったのは、学校が襲われ、少女たちが射殺されるという悲劇でした。ところがそれはすぐに、もうひ

とつの驚きとなり、アーミッシュの人びとの生き方と文化に対する予期せぬ反響と議論が起りました。そのきっかけになったのは、この乱射事件直後に示したアーミッシュの対応でした。外部の人間にはとても考えられない態度を示したからです。

著者は、この対応を次のように記しています。

……アーミッシュのなかには、事件後わずか数時間のうちに、早くもロバーツの家族に手を差し伸べた人たちがいた。

近くの教区の牧師エイモスは、われわれにこんなふうの説明した。

「ええ、私たち三人は、月曜の夜は消防署近くにいたんですが、そのとき、ロバーツの未亡人エイミーに言葉をかけにいこう、ということになりました。……私たちは一〇分ほどお邪魔してお悔やみを言い、あなたたちには何も悪い感情をもっていませんから、とお伝えしてきました」……

その翌日から、ロバーツの両親のもとをつぎつぎとアーミッシュを訪れては、赦しの言葉を伝え、彼らを優しく気づかった。

……
アーミッシュの恵みは、自然に出る言葉や態度にとどまらなかった。殺された何人かの子の親たちは、ロバーツ家の人々から娘の葬儀に招待した。さらに人々を驚かせたのは、土曜日にジョー

ジタウン統一メソジスト教会で行われたロバーツの埋葬では、七五人の参列者の半分以上がアーミッシュだったことである。近隣の牧師エイモスもその一人だったが、単にそうするものだと思っただけだと言う。

「自然と、行かなくちゃ、という話になったんです」とエイモスは言った。

……

ロバーツの葬儀の前日か前々日、我が子を埋葬したばかりのアーミッシュの親たちも何人か墓地へ出向いて、エイミーにお悔やみを言い、抱擁している。……

……

彼らの赦しは、お金の形でも表された。事件の二日後、ニッケル・マインズ・アカウンタビリティ委員会が発足したとき、委員たちはロバーツ家も支援したいと思った。……

……

委員会はロバーツ家に連絡をとり、基金の一部を未亡人に渡すことを決めた。(七六頁以下)

……事件の二日後の水曜日には、我々がマスコミから受ける問い合わせも、アーミッシュ学校に関するものから、アーミッシュの赦しに変わっていた。なぜこんなに早く赦せるのか？ 指導者

ゆるしとは何か

の指示か？ あるいは、すべては偽装で自己宣伝なのか？

……

我々がインタビューしたアーミッシュ全員がロバーツを赦し、彼の家族に思いやりを示したのは教会の指令でもなんでもなく、信仰から自然に出たものだと口を揃えた。逆に、アーミッシュの赦しに外部の人が驚いたことが、彼らには意外だったようだ。

(八三頁以下)

「赦し」の慣習・ルーツ・精神・実践

乱射事件に対する「アーミッシュの赦し」により、称賛の声と共に、彼らの悲しみや怒りの感情はどこへいったのか？ 彼らは運命論者なのか？ 悔い改めない罪人を赦してよいのか？ といった疑問の声も上がりました。第二部の第六章から第九章は、結局、ニッケル・マインズの赦しは例外的なものなのか、それとも一般性を含むものなのかと問い、文化の視点から答えを見いだそうとしています。ここでいう文化とは「ある集団の信念と行動のレパートリー」(一一四頁)を指し、この中には、深く根を下ろし、頻繁に実行されるために無意識となっている想定や振る舞いも含まれます。この文化は、当該集団の歴史とそれまでの教育を反映しており、時と共に変化するにもかかわらず、多くの場合、その深層構造はほとんど変わりません。したがってその変化も、

既存のパターンを繰り返すような仕方では展開していきません。

アーミッシュは、これまで様々な土地で暮らしてきましたが、その文化の基盤は、一六世紀ヨーロッパの激動のなかで獲得された価値観と習慣にあります。アナバプテストつまり「再洗礼派」と呼ばれた彼らの祖先は、イエスの命じた教えに献身的に従うことを信仰の基本に据え、成人洗礼を主張し、世俗国家による保護や承認を拒絶しました。彼らは、理不尽な目にあっても、その説明を神に求めようとせず、悲劇をそのまま神にゆだねるように勧めました。このような生き方は、結果として、殉教者を生みだしますが、それも、敵を愛し、わが身を守ることを拒んだイエスに倣うこととして受けとめられました。

すでに指摘したように、本書の魅力のひとつは、この「アーミッシュの赦しのルーツは何か？」という問いをアーミッシュに直接ぶつけ、つまりインタビューをし、答えを引き出していることにあります。彼らの答えは、新約聖書からの引用句に満ち、特にマタイ福音書の言葉に集中していました。そのなかでも、アーミッシュの生活において重要な位置を占めているのは「主の祈り」です。これについて、著者は次のように述べています。

・「我らに罪を犯すものを我らが赦す如く、我らの罪をも赦したまえ」

アーミッシュの宗教生活にとって、この祈りは特別なものなんです、とギドは続けた。「主の祈りは、〈すべての〉礼拝で唱えられます。普段の礼拝だけでなく、結婚式でも、葬式でも、叙任式でも、必ず主の祈りが唱えられるんですよ」

サデイもこうつけ加えた。「家族が一緒に唱える」朝の祈りでも、主の祈りを唱えます。夕べの祈りでは、父親が声に出して唱えるんですよ」

「子どもが最初に覚える祈りです」と再びギドは言う。

「言えるようになるまで、繰り返し教えられるので、学校へ上がる前に主の祈りを覚えてしまう。四歳ともなれば、ドイツ語で暗記している子もいるでしょうね」。(一四七頁以下)

・アーミッシュの赦しのルーツを探ると、決まって「主の祈り」に行きあう。誰にインタビューをしても、アーミッシュの書籍、新聞、雑誌のどれを見ても、この祈りがある。しかし一体なぜ、彼らは「主の祈り」にそれほどまでの価値を置くのだろうか？

(一四九頁)

「アーミッシュはなぜ主の祈りを重視するのか」という問いに對する答えは、著者によると、「アーミッシュのコミュニティ重視の生活様式」(一四九頁)にあります。アメリカの主流となっ

ている文化において重視されているのは、個人の権利、自由、好み、創造性などですが、アーミッシュの価値観の中核にあるのは、むしろ自己否定、従順、受容、そして慎ましさです。アーミッシュは、教会の権威に基づくオルドヌンク (Ordnung、「教会の不文律」(一五〇頁)) に従うこと、そして究極的には神に服従することを信仰と生活の基本にしています。例えば、マタイによる福音書六章の「主の祈り」の記事の直前に記されているように、祈りも慎ましいものでなければならず、多くの祈りは祈り書から引用されます。したがって牧師の祈りでさえ自由祈りではありません。「主の祈り」は、家庭において一日二回、朝と夕に唱えられ、食前と食後の黙禱の間にも捧げられる「祈りのなかの祈り」(一五二頁)です。それはアーミッシュの精神性の中核となっています。

しかも同じ「主の祈り」でも、「我らに罪を犯すものを我らが赦す如く、我らの罪をも赦したまえ」という箇所について、アーミッシュは、他のプロテスタント教会と異なる解釈をしています。アーミッシュによると、「主の祈り」は、その後続く、「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」(マタイ六・二四―一五)という句に基づいて解釈されなければなりません。したがって神の赦しは、他者を進んで赦すことができるかどうかにかかってお

り、自分が赦さなければ赦されないことになります。著者によると、この信仰こそが、ニッケル・マインズ乱射事件の後に示されたあの赦しの言葉と行為の源だったのです。

なお、「大方のプロテスタントは、神は罪を犯した者をもお赦し下さるのだから、不当な仕打ちを受けた者も相手をお赦すべきなのだ」(一五六頁)という具合に理解しています。仏教的表現を用いるならば、アーミッシュが自力的に解釈するのに対し、多くのプロテスタント教会は他力的に解釈しています。この解釈の違いは、カトリック教会とプロテスタント教会の解釈の違いにもみられ、キリスト教のみならず宗教史全般を貫く根本問題となっています。したがってこの視点から捉えるならば、アーミッシュは、キリスト教のプロテスタントの一分派というだけでなく、宗教史におけるひとつの特異な信仰類型を現実に生きていることとなります。

「アーミッシュの赦しのルーツは何か？」という問いを立てつつ、著者は、聖書の言葉の引用とは別に、もうひとつの答えを期待していました。それは、今も、オールド・オーダー・アーミッシュと呼ばれる人びとの生ける手本となっている人びとへの言及です。つまり「主の祈り」がアーミッシュの赦しの根幹であるとしても、その実践を促す物語も存在するはずだからです。彼らは、

一五二〇年代からほぼ一〇〇年にわたって、世俗の権威と宗教的権威の双方から排撃され、虐げられ、「現代ならさしずめ電気椅子に送られた過去をもつ集団」(二六一頁)の子孫です。この間、断頭や火あぶりに処せられた信徒数はおよそ二五〇〇人。彼らの殉教物語は、礼拝だけでなく、家庭でも、学校でも繰り返し物語られ、アーミツシユはそこから、神の摂理、現世の悪、絶体絶命の状況における神への忠誠といった教えを汲みとってきました。しかしその伝統は、今なお生きているのでしょうか。

インタビューの結果、著者が期待していたとおり、初期キリスト教と一六世紀のアナバプテストの殉教者譚を満載した千頁の大著『殉教者の鏡』は、今も読まれ、教えられていることが確認されました。殉教の歴史は、恨みの歴史としてではなく、自己放棄の手本として読まれてきました。自ら殉教の物語を語り続けることは、敵を赦しつつ殉教していった人物を自らのロールモデルとすることであり、乱射事件に対するコミュニティの反応も、その延長線にあったと考えることができます。「赦しは、『殉教者の鏡』に一貫して流れるテーマ」(二七一頁)です——『殉教者の鏡』は、メノナイトのオランダ人牧師が一六六〇年に編纂したもので、後にドイツ語と英語に翻訳され、現在もアーミツシユの間で広く読まれています。

加害者を赦すのが難しいことは、アーミツシユにとつても同じです。だからこそ彼らは子どものときから赦し教え、自らもその実践に多大なエネルギーを注いできました。アーミツシユの宗教教育は家庭を基本としており、子どもたちは日常の家庭生活と躰を通して赦しを学びます。それはやがて、個人の意志よりも神と共同体の意志を優先させる「ゲラツセンハイト (Gelassenheit、従順、服従)」や「ウフガヴァ (uffgawa 放棄する)」(一六三頁)と呼ばれる態度を育みます。大人の場合、共同体における赦しは、春と秋、年に二回行われる聖餐礼拝 (Abendmahl) において具体的に確認されます。共同体の全メンバーによる相互の赦しが確認されないかぎり、パンとブドウ酒を配る聖餐式は行われません。四回の日曜日、つまり一カ月の期間 (聖餐節) をかけて、互いに赦しあい、心をひとつにする準備が行われます。アーミツシユの礼拝は隔週に守られるので、第二の日曜日は聖餐礼拝の前の礼拝に当たり、この「戒律礼拝 (Ordnungsgemeinde)」なごし「協議集会 (Council Meeting)」と呼ばれる礼拝では、「マタイによる福音書一八章」が読まれ、「心を入れ替えてこどものようになり」、「四段階の手続き」を経て赦しを行うことが求められます。アーミツシユは、聖餐式において、神とメンバーに対する正しい関係を改めて学び、それからの六カ月をアーミツシユとして生きることを確認するのです。

しかしながら、メンバーの全員が、オールドヌンクつまり教会の不文律を完全に受け入れ、遵守するとはかぎりません。オールドヌンクを破る者が現れたとき、アーミッシュはどうするのでしょうか。この問題を扱っているのが、第三部の第十一章「シャニング（忌避）への疑問」です。

「赦し」の定義

第三部は四章から成り、赦しの定義、忌避の問題、摂理の問題、そしてアーミッシュの理解の独自性を論じています。これらの内容は、アーミッシュに関する私たちの素朴な疑問に答えてくれるものとなっております、丁寧に読みたい箇所です。

まず第十章「ニッケル・マインズの赦し」を読んでみましょう。この章の狙いは、「赦し」に関する今日の諸研究の成果を取り入れて、アーミッシュのいう「赦し」の内容の特徴を明らかにし、多様な批判を整理することにあります。著者が採用している定義は、ロバート・D・エンライト (Robert D. Enright) やエヴェレット・L・ワージントン・ジュニア (Everett L. Worthington, Jr.) らによって提案されているものです。前者の著書『ゆるしの選択』の内容は本稿においてすでに紹介したとおりであり、そこで援用されていたのはイギリスの哲学者ジョンナ・ノースの定義でした。それは「他者から不当な害を受けたとき、憤る権利を否定す

るのではなく、加害者に憐憫、慈悲、愛を与えようと努めることを通じて、加害者への憤りを克服することを赦しという」(一九八頁) というものでした。エンライトによると、ここには被害を客観的に被害として真摯に受けとめること、被害者には道義的にも怒る権利があること、そして赦すためには、立腹して憤る権利を放棄しなければならぬことが含まれています。したがって赦しは加害者の悔悛や謝罪に依存しないことになり、この点で「赦免 (pardon)」や「和解 (reconciliation)」と異なります。「赦免」は、加害者が自ら招く懲罰(法的な処罰やその他)を免れることであり、「和解」は、信頼関係の回復を基本とする関係の修復を意味するからです。それゆえ被害者は、和解しなくても赦すことは可能であり、「ニッケル・マインズの赦しは現実を無視している」との批判は、的を射ていないことになります。

では、「子どもが虐殺されても、怒らないような社会とは何か、それは異常な社会ではないのか」という批判に対して、アーミッシュは何と答えるのでしょうか。著者はまず、丁寧なインタビューをとおして、怒りの感情が吐露されるケースが少なくないことを確認し、「情緒体験とその表現は、いずれも文化的条件づけによって形づくられる、怒りも例外ではない」(二〇四頁) とする心理学的見解に基づき、こう述べます。つまり「ニッケル・マインズ事件で見られた感情の抑制は、怒りに対する彼らの通念を反映し

たものといえる」(同)と。アーミツシユにとって怒りは危険な感情であり、彼らは、赦しの研究者たちが求める「怒り」と「憤り」の区別を実践していたのです。前者は、害を受けたときに示す最初の反応であり、後者はその最初の怒りを感じ続けること指します。この「憤り」がやがて恨みの念に至ることは明らかであり、怒ることがあっても、恨んではいけないというのがアーミツシユの教えです。

赦しを個人主義的考えると、「なぜアーミツシユは、他人に代わって赦しを与えるのか」という問いも出てきますが、著者によれば、アーミツシユは、乱射事件によってコミュニティ全体が傷ついたと考えており、一人ひとりはいわば相互扶助の精神で行動しています。しかしたとえそうだとしても、「その赦しはそれとさだけのものだったのか」という問いが出てきます。この問いに対しては、エヴェレット・L・ワージントン・ジュニアの「決意された赦し」と「心からの赦し」の区別が適用され、ニッケル・マインズの赦しは「決意された赦し」であつたという解釈が提示されています。この「心からの赦し」は、否定的感情——憤り、恨み、あるいは憎悪など——が肯定的感情に置き換えられるケースを指し、「決意された赦し」は、否定的感情は残っていても、否定的行動はコントロールするという誓いを指します。この区別は、赦しには短期的側面と長期的側面があり、しかも、赦そうと

する決意が感情的な変化を誘発することを通して、両者は結びついていることを示唆しています。なおワージントンによると、マタイによる福音書六章の「主の祈り」に出てくる赦しと、同一八章の「赦さない家来」に出てくる赦しは、共に「決意された赦し」に相当します。

最後に残された問いは、「赦しは、自己嫌悪の感情を背景としているのではないのか」「赦しの強制は、被害者の苦痛を増大させるだけではないのか」という問いです。著者は、これらの問題は起こっていないと判断していますが、詳しい説明は見当たりません。なお、アーミツシユ内部の争議及び法廷論争に関する情報に関心のある方には、大河原眞美著『法廷の中のアーミツシユ』(明石書店、二〇一四年)がお勧めです。

忌避

アーミツシユという名称は、一六世紀の再洗礼派の一翼を形成した「スイス兄弟団」から、一七世紀末に分離して生まれた宗教集団の指導者ヤーコプ・アンマン (Jakob Ammann 一六四四-一七三〇、メノナイト派の牧師) に由来しています。この分裂劇の主な原因は、「忌避 (Meidung, shunning)」の厳格な適用およびその適用範囲をめぐる解釈論争にありました。「忌避」とは元来「この世的なものを避け、分離すること」を意味しています。

当時のスイス兄弟団では、この忌避の適用が幾分穏やかに行われていたのに対し、アンマンはその厳格な適用を求めました。一六九三年から九七年にかけて、スイスのベルン州をはじめとするライン川上流地方の寒村で繰り返された論争の結果、アンマンの主張を支持する人々はメノナイト派と袂を分かちました。そして彼らは、アンマン派を意味する「アマニツシュ」（後には「アーミツシュ」と呼ばれるようになりました）。

この事実から、「忌避」はアーミツシュにとつてどうしても譲れない根本問題であることが分かります。アーミツシュはメノナイト派から分離したセクトであるだけでなく、その後の歴史もこの「忌避」の問題をめぐる分裂の歴史でした。仮に一六九三年を彼らのアーミツシュとしての活動の起点とすると、この「忌避」には三百年以上の歴史があることとなります。したがって今日「忌避」について論ずる際にも、この歴史の重みと、それを支えてきた二元論的救済観を念頭に置かなければなりません。

『アーミツシュの赦し』の著者は、この点を十分に踏まえ、結論として、アーミツシュの立場に立つならば、「忌避」は決して異常な事柄でなく、理解可能であるとしています。その際、注意すべきこととして指摘されているのは、「赦し」と「赦免」の違い、そして教会とこの世の分離という「二王国論」です。

「赦し」は、すでに述べたように、加害者の態度に関わりなく

被害者が一方的に与える贈り物を意味するのに対し、「赦免」は、少なくともキリスト教の伝統では悔い改めを前提としています。「忌避」は、アーミツシュが教会の不文律であるオールドマンクを破つたにもかかわらず、悔い改めの勧めを拒否し、その結果、教会と社会から排除されてしまう事態を指します。悔い改めない者は、「赦免」を受けられず、破門され、そして「忌避」されます。いったん忌避されると、それまでの人間関係は完全に断たれるのですが、現実には、特定の事項が禁止されるという形式をとり、その後、本人が悔い改めるならば、「赦免」が与えられ、破門も解かれます。つまり教会(共同体)に復帰することができます。アーミツシュの観点からすれば、これらの一連の手続きは、決して残酷な断罪ではなく、破門された者に永遠の罰を思い起こさせるための愛の業です。それは、神の国へと通ずる教会の純粋性を保つために必要不可欠で神聖な業です。そもそも洗礼を受けてアーミツシュの一員となった者は、終生、オールドマンクを遵守する責務があると考えられているのです。

なおこの章には、オールドマンクについて、次のような興味深い説明もみられます。つまり「オールドマンクからの逸脱が罪になるのは、自分本位と反抗、つまり不従順な心の現れであるからなのだ」(二二四頁以下)、「大多数のアーミツシュにとつては、オールドマンクが何を禁止するかは、実はそれほど重要な問題ではない。

禁止内容が翌年変わっても、それはそれでいい。肝心なのは、従順と不従順の区別を知ること、教会の無謬性を守ることではないのである」(二二六頁)。しかしこれらの解説には注意しなければなりません。再洗礼派のグループには、可視的教会と不可視的教会を区別して、後者を重視することに反対し、山上の説教を文字通りに実践することを大切にしてきた長い歴史があるからです。彼らにとって、信仰と現実是不可分なものなのです。

悲嘆・摂理・正義

第十二章「悲嘆、神の摂理、そして正義」は、アーミッシュが子供たちの死をどのように受けとめ、嘆き、悪の实在を目の前にしつつ神に何を求めたのかを明らかにしようとしています。

アーミッシュは生活の様々な場面において慎みを重んずるため、公の場でも泣きわめいたり、身悶えしたりすることはありません。誰かが亡くなると、一人か二人の親戚が泊まり込んで家事を手伝い、近所の人たちも家畜の世話や必要な農作業を行い、作業を終えるとそとと帰って行きます。葬儀は、イエス・キリストの死と復活の記事にならって、亡くなってから三日目に行われます。遺体は、ヨハネの黙示録三章の記事に基づき、白装束に包まれますが、女性の場合には、結婚式に着た白い服と白いエプロンが用意されます。葬儀に関する一切の仕事は、故人あるいはその

家族と親しくしている夫婦が取り仕切ってくれるため、家族は、その間、互いに悲しみを共有し、故人の思い出に浸ることが出来ます。遺体はその家の一階に安置され、弔問客は「ゲラッセンハイト」を旨とするアーミッシュらしく、控えめな感情表現で家族を慰めます。

堤純子著『アーミッシュ』(二〇一〇年、未知谷)の最終章「死」には、アーミッシュの葬儀や墓地に関する記述がみられるので、ここでその一部を紹介しておきましょう。私たちの理解を深める上で、きつと役立つはずで、ただしこの記述は、オハイオ州コロンバスでの体験を基本にしているので、情報源に制約があることを承知しつつ、読む必要があります。例えば、ランカスター地方のケースについては、ドナルト・B・クレイビル／ダニエル・ロドリゲス(写真)著『アーミッシュの昨日、今日、明日』の三三章(「厳かな死」)の記述が参考になります。

・この間、聖職者の依頼を受けて、数人の男性がその家の墓地に、墓穴を掘る作業にあたる。墓地はたいいてい、日常の農作業や母屋全体を見渡すことができる小高い丘の上に作られており、地形の関係で丘になった部分がない家は、農場の一角に墓地が作られている。アーミッシュが多く住む地域を歩くと、上が平らになった

小高い丘をよく見かける。平らな部分には、小さな石の礎がたくさん並んでおり、その周囲は白い柵でかこまれている。これがアーミッシュの墓地である。そこに立つてみると、なるほどその家の人たちが働いている様子や、子どもたちの遊ぶ姿がよく見える。ある家の墓地では、小さな女の子たちが柵のまわりに花を植えていた。(『アーミッシュ』二五七頁)

・亡くなってから三日目の朝、家の中か納屋で葬儀が行われる。これは聖書や賛美歌の一節の朗読が中心で、一時間半程度の短いものである。アーミッシュは、葬儀のとき、讚美歌を歌わないので、たとえば「おやすみ、愛する者よ。おやすみ、善き友よ」などの讚美歌も朗読されるだけである。アーミッシュは一切の装飾を禁じているので、遺体や棺を花輪で飾るところか、一本の花が供えられることもない。

葬儀の後、棺は家で使う馬車に乗せられ、墓地へと運ばれる。そして、その後ろには、参列者の長い馬車の列が続く。……

墓地に着くと、棺は馬車から降ろされ、そこで再び短い礼拝が行われる。そして、故人ともっとも親しかった人たちが、棺を墓穴に下ろし、聖職者が讚美歌を朗読する中、棺に土がかけられると、墓地の中にいる人たちだけでなく、その外にいる墓地に入りきれなかった人たちも、男性は皆、帽子をとって頭を垂れ、女性

ゆるしとは何か

も深く頭を垂れて祈りを捧げる。亡くなった人を悼み、その新たな旅立ちに思いを馳せる静かな弔いである。

墓には、故人の名前と生没年を刻んだだけの石碑が置かれる。(同、二五九頁以下)

『アーミッシュの救し』の著者によると、アーミッシュの喪に服する方法には、四つの特徴がみられます。第一に、「ランカスター居住地では、誰かが亡くなると、遺族のもとを毎晩、弔問客が訪れ、それが二、三週間」(二四三頁)続き、その後も一年間、日曜日の午後の弔問が続けられます。第二に、喪中の女性は黒服を着用し、その期間は死者との関係によって、六週間、三カ月、六カ月、一年と異なります。この儀礼には、コミュニティの人に亡くなった人を思い起こさせ、遺族に対する適切な配慮を促すという意味があります。第三に、亡くなった人に感謝する、あるいは今の心境を語る詩を書くこと、そしてこの詩を発表する社会的な場があることです。第四に、「サークル・レター」という、特定の経験を共有する人びとの間において、手紙の交換が行われていることです。

アーミッシュの聖職者はいわゆる神学的訓練をまったく受けておらず、悪の存在や神の摂理に関する問題について、その神学的

解答を、彼らの重んずる信仰告白や神学書から引き出すことはありません。したがって、それらの諸文献から彼らの理解を推定するという方法を採用することはできず、著者は、インタビュウ方式を採用し、次のような答えを導きだしています。

・悪の問題への答えを求め、インタビュウしたアーミツシユは皆、結局のところ神の摂理は神秘に包まれているという考えに至った。彼ら特有の慎ましきで、事件が起きたわけも、ここからどんな善がもたらされるのかもわからない、と言っただけだ。……「神秘のない宗教なんて、車輪のない馬車みたいなものだ」。(二五五頁)

・アーミツシユは神の意志に素朴な信頼を寄せるが、運命論者ではない。……「私たちは雨乞いをしません。雨が降るまで待ち、降ったら神に感謝するのです」。(二五八頁)

・アナバプテストは無報復、敵への愛、無抵抗主義を唱え、処罰を人ではなく、直接神の手にゆだねる。一六世紀の殉教者が不当な死を受け入れ、他の信者もその死に報復しようとしなかったのは、究極的裁きは神がなさるものと信じていたからにほかならない。アーミツシユが現世の赦しを自由に行う背景には、裁きを

巡るこの古くからの考えもある。(二五八頁以下)

アーミツシユ・グレイスと現代

第三章「アーミツシユ・グレイスと我々」は、「ニッケル・マインズの赦し」に対する主要な反応が見落としている点と、非アーミツシユである私たちがそこから学ぶべき事柄を探っています。

著者によると、私たちがまず再確認しなければならないのは、「アーミツシユは我々と異なる」ということです。その特質について、こう記しています。

・アーミツシユが自ら説明するところによれば、彼ら特有のこの精神の原型は新約聖書にある。……しかし、彼らの生き方は、聖書、あるいはイエスの言葉を真摯に受け止める態度だけではまだ説明できない。彼らの精神世界がはつきり浮かび上がってくるのは、特有の聖書理解、非暴力を貫いた殉教者の伝統というレンズを通して見たときである。今も身近な存在である殉教者に諭され、励まされ、アーミツシユは復讐よりも苦しみ、闘争よりも（ウフガヴァ）、恨みよりも赦しに高い価値を置いてきた。

……アーミツシユは、自分が赦されるかどうかは、人を進んで赦すかどうかにかかっていると心底信じている。彼らにとって、

赦しは〈善行〉以上のもの、キリスト教の信仰の核心である。

……アーミッシュの信仰は行為で試される。信念も言葉も大切だが、信仰の地金は行為でわかる。つまり、〈本当の〉赦しとは、赦したことを行為で示すことをいうのである。この場合は、殺人犯の家族に思いやりのある行為を示すことだった。(二七〇頁以下)

アメリカの一般市民が忘れていたのは、第一に、アーミッシュの赦しのうちに「対抗文化的側面」つまり「対抗文化的価値体系」が含まれていたことです。第二に、アーミッシュの二王国論を無視して、この赦しを複雑な人種問題や民族紛争にそのまま当てはめようとしたことです。むしろ私たちが学ばなければならないのは、アーミッシュの赦しは文化的に形成された習慣の現れだったということでした。したがって私たちに突きつけられているのは、赦しに価値を見いだし、これを涵養する文化を作りだそうとしているのかどうか、そしてそのための物語と習慣を生み出すことができるのかどうかということです。それは、敵を悪魔ではなく人間として遇し、復讐を思いとどまる文化です。それは、宗教が怒りや復讐を乗り越えて、赦しと恵みを導くような文化です。赦しは、決して忘れることではなく、むしろ赦しの行為によって癒しがもたらされたことを記憶することに他なりません。記憶

ゆるしとは何か

(remember)とは、悲劇と不正によって寸断された全体的な生のかげらを拾い集め、再び組み入れること(re-member)であり、アーミッシュの赦しの習慣は、十字架上で赦しの言葉を語ったイエスや、氷の湖に落ちた敵を救うために引き返し、処刑されてしまったデイルク・ウイレムスの記憶によって培われたものでした。そして「ニッケル・マインズで彼らがとった行動も、今後、何世代にもわたって食卓で語られ、理不尽な悲劇、そして暴力に、信仰の力と温かい思いやりで応えた記憶が受け継がれていくに違いない」(二八一頁以下)ありません。

その後、傷ついた五人の少女のうち四人は復学し、最も重症だった子はまだ半ばこん睡状態で両親のもとで看病されています。

「赦し」の未来

『アーミッシュの赦し』には、「アーミッシュ社会の未来」という文章はありません。しかし、「赦し」の未来について語るには、「アーミッシュ社会の未来」について考えてみる必要があります。もしもアーミッシュがアメリカ文化に飲み込まれ、やがて地上から消え去ってしまうならば、「ニッケル・マインズの赦し」は過去の歴史の一齣にすぎなくなり、人類の進むべき方向を指し示すその衝撃的な力も同時に失われてしまうでしょう。

ここでは、ドナルド・B・クレイビルの見通しを紹介しておきます。ゆっくり読んでみてください。

・現代文化とアーミッシュの思想とでは、自己実現についての考え方に大きな相違がある。現代人にとって、人間の満足と自己実現を理解する手がかりは、個人の自由にある。選択の自由と独立によって、活力と満足がもたらされるのだ。アーミッシュは対照的に、自己実現は、彼らの信頼するコミュニティに没頭したときに生じると信じている。真の個性は、大きな母体に従う時に見いだされると考えるのである。（『アーミッシュの謎』一六六頁）

・アーミッシュは、個性を失った代わりに、コミュニティ、アイデンティティ、そして帰属意識を得た。彼らは、自由を失った代わりに、安定していて、安心して身をまかすことのできる社会秩序を得たのである。（同、一七〇頁）

・現代の技術と専門知識、そして、信心深いアーミッシュ・コミュニティの伝統的なやり方による継続性と満足。真の進歩とは、このような両方の世界が持つもつとも良いところを結び合わせることを意味するのである。（同、一七三頁）。

・アーミッシュ生活の将来を予言することは難しい。市場価格、政府の規制、都市化といった外部の圧力だけでなく、コミュニティ内部の努力によっても、彼らの文化様式は新しいもの変わるからだ。……

過去の三つの生活実践、慣習によって、アーミッシュの未来への対応が具体的に見えてくるだろう。すなわち、集約型農業、農業以外の仕事、そして移住である。（『アーミッシュの昨日、今日、明日』一四三頁）

・しかし、農業は着実に変化するだろう。地域市場へ出す農産物を生産するために、小規模の土地で特産品を作るアーミッシュが増えているので、大規模農場は今後もその規模を縮小し続けるだろう。……

一九八〇年代、鋤を捨て、家内工業を興した意欲的な多くのアーミッシュは、劇的な変化の到来を告げた。二一世紀初めの一〇年までに、約二〇〇〇ものアーミッシュ経営のビジネスがランカスター郡内で広がったのだ。今や三分の二以上のアーミッシュ家計は、なんらかのビジネスに関係しており、この傾向は続きそうである。

……これらのビジネスは、アーミッシュの平等な社会構造を、何年もかかって、ゆっくりと変えていくだろう。そして、農業、

日雇い労働者、起業家の間の経済的、文化的格差は広がっていくだろう。(同、一四五頁以下)

・もし、アーミッシュが子どもたちを教育して、コミュニティにとどめることができ、彼らの魂を売り渡すことなく生計を立て、より大きな世界との交わりを制限することができるならば、おそらく彼らは、二一世紀にも繁栄するだろう。(同、一四六頁)

アーミッシュの世界は、何もかもが私たちの世界とあべこべになつていようにみえます。そしてあべこべだからこそ、魅力があるのでしょう。アーミッシュには「欲望の抑制」があり、私たちには「欲望の爆発」があります。アーミッシュには相互援助と平和があり、私たちには競争と暴力があります。

アーミッシュの世界を外側から支えてきたもの、それは農業です。したがってアメリカ社会と農業の急激な変化は彼らの生活にも影響を与えずにおきません。移住によって理想とする土地を得る方法がなくなつたとき、彼らは本当に厳しい状況に追い込まれるにちがいありません。

著者は、様々な障壁が出てくることを予想しながらも、「真の進歩とは、このような両方の世界が持つのもっとも良いところを結び合わせることを意味するのであろう」と語り、アーミッシュの

未来に温かな眼差しを向けています。

V 結び

キリスト教育のなかで「ゆるし」について語るための準備をすること、これが筆者の当面の課題です。本稿では、あえて「ゆるし」に関する多様な理解を跡づけました。一見、バラバラに見えるこれらの見解も、キリスト教育のなかで、おのおの場所を得て、まとまりのある姿を現すと考えています。

ここで、これまでの内容をまとめ、さらにそれらの書物との対話の中で浮かんだイメージの一部を物語ることをもって、本稿の結びとしましょう。

・『人はなぜ「憎む」のか』を通して、次のことが明らかになりました。つまり、人は古い脳をもつがゆえに、憎まずにいられないこと、しかし古い脳が生みだす原始的な心の特性を知るならば、その憎しみを乗り越えることができることです。たしかに憎しみは「心の核兵器」として機能しますが、新しい脳には、それを阻止する可能性がやどつています。著者は、「憎しみを根絶するための具体的戦略」を提示しています。これは教育に携わる者にとつて、大いなるチャンスです。それらを、カリキュラムの一

部として教育現場に取り込む可能性が出てくるからです。今や「ゆるし」は、倫理・道徳や心理学だけでなく生物学的知見も取り入れて、検討されるべきなのです。

・最初の構想では、『人はなぜ「憎む」のか』に続き、デーヴ・グロスマン著『「人殺し」の心理学』（原書房、一九九八年）を取り上げる予定でした。しかしそれは、「ゆるし」を主題とする本稿の狙いにとって、テーマが特殊化しすぎていると考え、後で、「学校における暴力やいじめ問題」を考える際に、改めて言及することにしました。

ところが、アーミッシュに関する記述を終えた段階で、やはりこの書物を取り上げるべきであるとの思いが強くなり、ここでその基本的発想を紹介することにしました。というのは、「アーミッシュの赦し」とアメリカ文化を対比する上で、この書物の知見は極めて有益だからです。それは、古い脳の働きである憎しみを活性化させるプログラムを解明しており、人を平和ではなく、戦争へと駆り立てるカリキュラムが存在することを明言しているからです。

『「人殺し」の心理学』の原題は、Dave Grossman, *ON KILLING: The Psychological Cost of Learning to Kill in War and Society*, 1995.であり、邦訳出版当時の著者の略歴は「前レンジャー部隊、

落下傘部隊隊員、前ウエスト・ポイント陸軍士官学校心理学教授、現アーカンソー州立大学軍事学教授、米陸軍中佐」となっています。

著者は「第一部 殺人と抵抗の存在」の結びにおいて、人間とは何者なのかということについて、こう述べています。

人間の身内にひそんで、同類である人間を殺すことへの強烈な抵抗を生み出す力、その本質を理解できるときはこないのかもしれない。しかし理解はできなくても感謝することはできる。この力があればこそ、人類はこれまで存続してきたのだ。戦争に勝つことが務めである軍の司令官は悩むかもしれないが、ひとつの種としては誇りに思つてよいことだろう。

殺人への抵抗が存在することは疑いを入れない。そしてそれが、本能的、理性的、環境的、遺伝的、文化的、社会的要因の強力な組み合わせの結果として存在することもまちがいない。まぎれもなく存在するその力の確かさが、人類にはやはり希望が残っていると信じさせてくれる。(七六頁)

もしも人間がこのように「同類である人間を殺すことへの強烈な抵抗感」をもつ存在であるとすれば、殺人を伴う戦争はそれほど起こらないはずです。そしてその抵抗感が、本来、まったく本

能的なものであるとすれば、人は殺人の一步手前で立ち止まるはずです。ところが、現実には暴力と戦争が繰り返し起こっています。この事実は、その抵抗感が完全なブレーキとして機能しておらず、いわば「壊れた不完全な状態」にあることを示唆しています。もしもそうだとすれば、たとえ様々な要因によって強力な抵抗感が生みだされるとしても、原理的にはその規制力を解除することができることになります。そしてこの解除のための技術が進歩するならば、国家は国民を簡単に戦場に送り込むことができず。著者はこの事態を、「兵士の訓練法は、同種である人間を殺すことへの本能的な抵抗感を克服するために発達してきた」(四六頁)と表現しています。

「第七部 ベトナムでの殺人」(第三三章 ベトナムでの脱感作と条件づけ——殺人への抵抗感の克服)の記述によると、第二次大戦の兵士の発砲率は一五から二〇パーセントであったのに対し、ベトナム戦争での発砲率は九〇から九五パーセントに昇りました。この数値の上昇は一体を意味するのでしょうか。それは、あの「解除のための技術」が導入され、いわば殺人が「神聖化」された結果です。具体的には、「脱感作、条件づけ、否認防衛機制の三方法の組み合わせ」(三一八頁)が用いられました。個々の詳しい説明は本文に譲るほかありませんが、脱感作とは「敏感性を軽減または除去すること」(二一七頁)であり、条件づけは

「(一) パブローフ派の古典的条件づけと (二) スキナー派のオペラント条件づけ」(三二〇頁)をその内容としており、兵士は「戦闘で人を殺しても、自分が実際に人を殺しているという事実をある程度まで否認できる」ように訓練されました。このように殺人のトラウマが残らないようにすること、これが否認防衛機制といわれる方法の狙いです。

この書物でもっともショッキングなのは、「第八部 アメリカでの殺人——アメリカは子どもたちに何をしているのか」です。著者によると、「殺人の神聖化」を推進するためのこの「三つの方法」は、軍隊だけでなく日常生活においても用いられています。あらゆる情報メディアが子どもたちを、日々、この「殺人の神聖化」へと駆り立てているというのです。

・『ゆるしの選択——怒りから解放されるために』は、心理学的見地から記された「ゆるし本」です。「ゆるし本」などという呼称は、もちろん一般には使われていません。これは、一部の若者たちの間で聞かれる「いじめ本」とか「癒し本」といった言葉にならって、筆者が勝手に作った言葉です。初めはいちいち断って使っていたのですが、現在では、その必要性も感じなくなっています。というのは、手ごろな値段で買える「ゆるし本」がかなり出版されているからです。それは、怒れる時代——ストレス

時代——の「そよ風」となっているようです。

「ゆるし本」を読んでみると、いくつかの特徴が分かります。倫理や道徳の観点から記された「ゆるし本」はめつたになく、ほとんどが心理学やカウンセリングの観点からまとめられています。しかもよく読むと、宗教的観点が陰に陽に取り入れられています。それも既成宗教の立場ではなく、広い意味での深層心理学やスピリチュアルな世界が前提とされています。そのため、最初は、心理学やカウンセリングの話かと思っただけでいるうちに、突然「すべては神様からのメッセージと考える」とか、「神様は乗り越えられる試練しか与えない」という記述が出てきます。しかしその「神」とは誰なのか、といった説明は最初から最後まで一切なく、その解釈は読者任せになっています。

その結果、どうなるでしょうか。どういうわけか「神」はすでに存在していることになっており、改めてその内容を問う方がおかしいかのような叙述になっています。しかしここでこそ、キリスト教教育は自らの基本的立場を明確にしなければなりません。

そしてそのための準備として読んで欲しいと考え、紹介したのが『ゆるしの選択——怒りから解放されるために』です。この本の特徴は、「ゆるし」に関するカウンセリングなどで知られている一般的常識を、カウンセリングではなく、数量的に計測できる方法によって客観的に実証された資料を用いて説明しているこ

とにあります。「怒り」と「病気」、「ゆるし」と「健康」は、それぞれ深く関連していることが明らかにされています。特に「ゆるし」と「赦免」と「和解」が明確に区別されることにより、「ゆるし」に関する議論は、今後、無用な混乱から解放されるはずで、さらに子どもの「ゆるしの理解」には、発達段階による違いがみられるという指摘は、既存のカリキュラムを再考すべきことを示唆しています。

『愛とゆるしの心理学』が出版されてから、すでに二十五年になろうとしています。出版界ではもう昔の本ということになります。少なくとも日本の現状から振り返ると、その後の時代を暗示する書物のひとつであったことが分かります。オウム真理教によるサリン事件の記憶も次第に薄れ、「カルト本」は姿を消したにもかかわらず、市場には「精神世界」や「靈性」のすばらしさを説く本があふれています。一般の情報のケースと同様に、若者は、その真偽を判断する知識と技術をもたずに、「スピリチュアルな世界」に関する膨大な情報に翻弄されています。

キリスト教教育に携わる者は、この情報の質を分析するすべに身につけておかなければなりません。そのひとつの手がかりは、キリスト教の歴史における異端論争にあります。例えば、グノーシスとキリスト教の関係を巡る知識を整理し、その本質を伝える

ことができるならば、混沌とした「精神世界」や「靈性」の問題をより深く考え、適切に指導することができるとは思いません。本稿で紹介したポリセンコ著『愛とゆるしの心理学』も、自らの主張を基礎づけるために、ユングの著作だけでなく、エレヌ・ペイゲルス著『アダムとエバとヘビ』（邦訳、ヨルダン社）を引用しており、さらには同著者の『ナグ・ハマデイ写本』（邦訳、白水社）に言及しています。彼女は、「私個人は、グノーシス派がその教えの中心部分として、自己認識の重要性を強調していることに心を引かれます」（二二八二頁）と述べ、「放蕩息子——靈的なオプティミズムの寓話」の項目では、「白雪姫のおとぎ話が不健康な罪悪感と心理的ペシミズムを癒すための青写真となるように、新約聖書の放蕩息子のたとえ話は、精神的・靈的なペシミズムを癒すための青写真です」（二七六頁）と語っています。このたとえ話は、彼女によると、「神による愛と許しの宣言と約束の「元型」（二七七頁）なのだそうです。

ポリセンコは、すでに述べたようにユダヤ教を背景とした家庭で育っており、ヘブライ語聖書だけでなく新約聖書も熟知しています。彼女はその上で、インナーチャイルドの神話を持ち出し、自らの心理療法の基本としています。したがってこの「真の自己」とは何なのか、その本質を明らかにしておかなければなりません。残念ながら、ここで直ちにその詳細な議論に入ることはできません。

ゆるしとは何か

んが、筆者の考えでは、この「精神性・靈性」の思想と聖書の思想は明確に異なります。もしもこの相違に関する基本的な知識を身につけることができるなら、学習者は自らの周りに溢れる情報に戸惑いつつも、その性格を冷静に分析することができるようになります。特に青年期の学習者にとって、「私とは何者なのか」あるいは「本当の自分とは何か」といった問いは、避けられない根源的な問いであり、彼らは生きた答えを求めています。

筆者のひとつの試みは、拙著『読む』（青踏社）に収めてあります。そこではヘブライ語聖書の「創世記一章」の解釈を通して、「創造信仰」のもつ意味、「ヘブライズムとヘレニズム」といったテーマが論じられています。また日本人の宗教意識の特徴については、拙著『日本人の宗教意識とキリスト教』（教文館）において論じています。

・『アーミッシュの救し』は、アメリカ社会のナルシシズムの文化と異なる世界を見せてくれました。「ニッケル・マインズの救し」はアーミッシュにとって極めて自然な行為であり、それは彼らの信仰と直結したものでした。著者は、これを宗教というよりも文化の問題として捉え、家庭生活を中心とした教育の成果とみなしています。その教育を支えているのは、新約聖書に記されたイエスの教えに対する献身の信仰と、彼らの祖先がその信仰の

四一

ゆえに引き受けた殉教の物語です。アーミッシュは、一六歳から二〇歳にかけて、最終的に自らのアイデンティティをどこに求めるのかを選択するのですが、それまでに自らの属する共同体の求める生き方を、言葉と行為によって十分に体感しています。それゆえ極めて高い確率で、伝統的な生き方を継承していきます。

しかしながら、それは洗脳の結果ではないのか、との批判があるのも事実です。アーミッシュには、個人の自由がないように見えるからです。人類の歴史が、封建主義と全体主義の克服を目指してきたにもかかわらず、アーミッシュの世界はそれと逆行するように感じられるからです。ところがこの独特な家族主義、集団主義、祭政一致主義は、一定以上の規模になることを拒否しており、例えば官僚主義のような組織の肥大化に伴う負の問題とは無縁です。いわば直接民主主義が機能する範囲に自らを限定することにより、アーミッシュはコミュニケーションと相互扶助の充実をはかり、老若男女、健常者も障害者も、すべての人が共に生きられる生活空間を実現しています。彼らは貧富の格差のない社会を追い求めています。

もちろんアーミッシュは、社会学的、経済学的、政治学的な検討を加えたうえでこのような生活形態を選択したわけではなく、素朴かつ真摯に、「ゆるし」と「国家による余分な干渉の排除」を実践することにより、今日の状況に至っています。

彼らのアイデンティティの根本には、「対抗文化的価値観」があり、その意味で「アーミッシュの救し」を簡単に模倣することはできません。彼らの発想と実践をそのまま異なる文化に移入しようとする者は、「対抗文化的価値観」が生みだす緊張関係も引き受けなければなりません。「つまみ食い」は不可能です。

日本の状況でこの課題を背負うとしたら、どうなるでしょうか。ましてこれを教育のテーマとして考えたら、教師も生徒も、自らの文化的伝統と本格的に対峙せざるをえなくなりそうです。しかしながら、どうせアーミッシュはプロテスタントの一セクトにすぎず、それをそのまま受け入れる必要はないという思いがあるとするれば、これも問題です。キリスト教の歴史を振り返るとき、たしかにセクトや異端は極端に走り、その主張は過激になりがちですが、多くの場合、主流派の主張と現状に対するアンチテーゼとなつていきます。したがってこの批判に耳を傾けることにより、主流派は自らの問題点に気づき、変革する機会をもつことができそうです。

たしかにアーミッシュの「主の祈り」の自力的解釈、あるいは二元論的救済観をそのまま受け入れることはできませんが、彼らの批判を、「生活実感」を伴わないキリスト教とキリスト教教育に対する批判として受けとめるならば、より積極的なカリキュラム作りも可能になるはずで、特に、キリスト教の歴史について

語る際に、指導者は、どのようなロールモデルを提供しようとしているのかを明確に自覚している必要があります。また、教育現場において、共に「主の祈り」が唱和されるような場面が形成されているのかどうか、第三者の目で観察する必要があります。学習者が「祈りの中の祈り」を知らずに卒業するようなことがあるとすれば、キリスト教育に携わる者は初心に帰らなければなりません。「ゆるし」の心は、この祈りと共に生まれるからです。